

# ノーベル賞の国際政治学

## ——第二次世界大戦以前の日本におけるノーベル賞の受容

吉 武 信 彦

International Politics of the Nobel Prize:  
Acceptance of the Nobel Prize in Japan before World War II

Nobuhiko YOSHITAKE

### 要 旨

本稿は、第二次世界大戦以前にノーベル、ノーベル賞に対する日本人の関心がいつ頃、いかなる経緯で形成され、いかなる特徴をもっていたかを考察するものである。

日本においてノーベルはよく知られている偉人の一人であり、ノーベル賞も世界で最も権威のある賞として広く知られている。日本におけるノーベル賞の受容を考える上で、1949年の湯川秀樹京都大学教授のノーベル物理学賞受賞は極めて大きな分岐点になっている。連合国の占領下におかれた日本で、日本人初のノーベル賞受賞者が出たことは、日本が世界に誇れる学問水準をもつことを世界に再認識させ、戦後日本の新国家づくりを鼓舞する出来事であった。これ以降、ノーベル賞に対する関心は日本人の間で格段に高まった。しかし、厳密に言えば、湯川の受賞以前においても、日本人受賞者はいなかったものの、ノーベル、ノーベル賞に対する関心は日本ですでにみられた。

本稿は、第二次世界大戦以前に出されたノーベルとノーベル賞に関する図書、新聞・雑誌記事を主に分析した。たとえば、ノーベルに関する最初の伝記は1909年にすでに出版されている。それ以後、ノーベルを「世界的事業家」、「大科学者」、「大発明家」、「爆薬王」といった形で紹介する図書が成人用、児童用に約40冊出ており、ノーベルを見習うべきモデルとして肯定的に紹介している。日中戦争、太平洋戦争の最中にもノーベルの本格的伝記が3冊続けて出版されている。また、同時期に「ノーベル賞文学叢書」全18巻も出版され、ノーベル文学賞受賞者の作品が翻訳されている。第二次世界大戦以前にノーベル、ノーベル賞が日本人の間で高い評価を得ていたからこそ、湯川の受賞の意義が国民の間で広く認識され、その後のノーベル賞に対する熱狂

的な態度につながったのである。

キーワード：アルフレッド・ノーベル、ノーベル賞、ノーベル平和賞、ノーベル文学賞、ノーベル伝

## Summary

The paper aims to discuss when and how the interest of the Japanese in Alfred Nobel and the Nobel Prize was formed before World War II and to examine the characteristics.

Alfred Nobel is one of the great figures well-known in Japan and the Nobel Prize is also known as the most prestigious award. Hideki Yukawa, professor of Kyoto University won the 1949 Nobel Prize in Physics, which was a watershed in consideration of acceptance of the Nobel Prize in Japan. Such a great accomplishment as the Japanese won the Nobel Prize for the first time under the occupation of the United States and other allied powers reminded the world of the high academic standards we the Japanese can be proud of and encouraged us to build a new nation in postwar Japan. Since then, the interest in the Nobel Prize has remarkably increased among the Japanese. However, strictly speaking, some Japanese were already interested in Alfred Nobel and the Nobel Prize even before the award-winning by Yukawa, despite no Japanese Nobel laureate.

The paper examined the literature and newspaper/journal articles on Alfred Nobel and the Nobel Prize released before World War II. The first biography of Alfred Nobel was published in 1909. About forty books for adults and children published since then described Alfred Nobel as worldwide entrepreneur, great scientist, great inventor, or the lord of dynamite and introduced him as a model to emulate. Even during the period of the Sino-Japanese War and the Pacific War, three serious biographies of Alfred Nobel were published one after another. Eighteen volumes of Collections of the Nobel Prize in Literature were also published in the same period and the works of the Nobel Laureates in Literature were translated into Japanese. High evaluation on Alfred Nobel and the Nobel Prize allowed us the Japanese to widely recognize significance of Yukawa's award-winning and later to be fanatical about the Nobel Prizes.

Key words: Alfred Bernhard Nobel, Nobel Prize, Nobel Peace Prize, Nobel Prize in Literature, Alfred Nobel biography

はじめに

1 第二次世界大戦以前の新聞、雑誌にみるノーベル、ノーベル賞紹介

- (1) 新聞、雑誌におけるノーベル、ノーベル賞紹介のはじまり
- (2) 新聞における紹介の全体的傾向

2 第二次世界大戦以前の図書にみるノーベル、ノーベル賞紹介

- (1) 第1期 1900年代：紹介のはじまり
- (2) 第2期 1910年代～1930年代：紹介の拡大と深化
- (3) 第3期 1940年代：紹介の成熟と変化

おわりに

## はじめに

今日、日本においてアルフレッド・ノーベル（1833～1896年、主要人物には生没年を記す。以下同様）は小学生の間でもよく知られている偉人の一人であり、そのノーベルが創設したノーベル賞も同様に世界で最も権威のある賞として広く知られている。本稿では、日本においてアルフレッド・ノーベルとノーベル賞がいつ頃いかなる形で紹介され、定着したのかを整理するものである。これは、必ずしも体系的な調査ではなく、試論的にその全体的な傾向を紹介するものにすぎない。

日本におけるノーベル賞の受容を考える上で、1949年の湯川秀樹京都大学教授（1907～1981年）のノーベル物理学賞受賞は極めて大きな分岐点になっている。第二次世界大戦に敗北し、連合国の占領下におかれた日本で、日本人初のノーベル賞受賞者が出たことは、日本が世界に誇れる学問水準をもつことを世界に再認識させ、当時の日本人にとって明るいニュースとなった。まさに戦後日本の新国家づくりを鼓舞する出来事であった<sup>1)</sup>。たとえば、湯川の受賞を受けて1949年12月10日の授賞式開催日にあわせて出版された『ノーベル傳』（再版）には以下のような記述がある。「原子核研究に一新紀元をかくした彼の偉業は湯川個人の名誉だけではなく日本物理学界の名誉であり、ひいてはわが学界、国民全体の名誉でもある。而も敗戦後の日本国民に自信と勇気を与えたことは、けだし計り知れないものがある。／文化国家の建設をめざしているわれわれ日本人の一人湯川博士に、世界文化の象徴であるノーベル賞が授与された栄光は、まことに意義深いことである」（引用文中の「／」は改行。以下同様）<sup>2)</sup>。

これ以降、ノーベル賞に対する関心は日本人の間で格段に高まったのである。それは、自然科学分野に限定されず、平和賞、文学賞も含めてノーベル賞全体に向けられた。その結果、毎年、日本人受賞者が出るかが注目され、それが現実になった際には大々的に報道され、日本国中がお祭り騒ぎになるのである。これは、戦後の日本社会においてノーベル賞がいかに高く評価されてきたかを物語っている。

以上のように、ノーベル賞に対する日本人の関心は、1949年の湯川の受賞をきっかけに高まった。しかし、突然、これによって日本人が関心をもったと考えることはできない。湯川の受賞以前においても、日本人受賞者はいなかったものの、ノーベル、ノーベル賞に対する関心は日本ですでにみられた。第二次世界大戦以前にノーベル、ノーベル賞が日本人の間で知られ、高い評価を得ていたからこそ、湯川の受賞の意義が国民の間で広く認識され、その後の熱狂的な態度につながったと考えられる。それゆえ、第二次世界大戦以前にノーベル、ノーベル賞に対する日本人の関心がいかなる経緯で形成され、いかなる特徴をもつものであったかを考察することは、日本とノーベル賞との関係を考える上で極めて重要であろう。

本稿は、アルフレッド・ノーベルが最後の遺言を書いた1895年から1945年までの50年間を基本的に対象とする。また、主たる史料として、日本の国会図書館蔵書データベース、新聞社の新聞記事データベースを利用するとともに、個別の文献、記事も必要に応じて参照し、データの背景を検討する。ノーベル賞についての分析では、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞、文学賞、平和賞の全分野の賞を対象とする。

まず第1章で第二次世界大戦以前の新聞、雑誌においてアルフレッド・ノーベル、ノーベル賞がいかに紹介され始め、さらに新聞記事件数の変遷を分析することにより紹介の全体的傾向を明らかにする。第2章では、第二次世界大戦以前の図書に注目し、その中でアルフレッド・ノーベル、ノーベル賞がいかに紹介され、日本人の間に受容されたのかを年代ごとに整理し、その特徴を考察する。対象の期間が長く、その間の資料も膨大にあるため、重要な動きに着目し根拠を示しつつ特徴、傾向を捉えることにする。

## 1 第二次世界大戦以前の新聞、雑誌にみるノーベル、ノーベル賞紹介

### (1) 新聞、雑誌におけるノーベル、ノーベル賞紹介のはじまり

アルフレッド・ノーベルは、いつ頃日本に紹介されたのであろうか。朝日新聞の記事データベースによれば、「ノーベル」の名前は1895年以降、登場している。これは、ロシアで石油事業を手がけていた長兄、ローベット・ノーベル（1829～1896年）の石油会社に関するものであり、記事にロシアの「ノーベル会社」、「ノーベル商会」として登場している<sup>3)</sup>。また、そのローベット・ノーベルが死去した際にも、1896年9月に同氏の死亡記事が出ており、「バクーの石油を発見して同地に一大ノーベル石油会社を設立」したと説明されている<sup>4)</sup>。このように、当初はアルフレッド・ノーベルよりも長兄のローベット・ノーベルのほうが日本で注目されていたのである。

アルフレッド・ノーベルが朝日新聞に初めて登場するのは、1896年8月の記事である。スウェーデンの探検家、アンドレ（1854～1897年）による北極探検に対して「アリフレドノーベル氏六万五千クロン」を寄付したとある<sup>5)</sup>。アルフレッド・ノーベルは、生前その莫大な財産から様々な人物、団体に寄付をしていたが、冒険家にも援助した一端が日本でも報道されたのであった<sup>6)</sup>。

また、同月には、イギリス裁判所で戦時禁制品不着訴訟である「ノーベル劇発薬会社対ゼンキンス事件」について判決が出たとの記事もある<sup>7)</sup>。これは、1894年の日清戦争開始直後に日本へ向かうノーベル劇発薬会社所有の船に積まれた「劇発薬」が香港にて陸揚げを強いられ、不着となり、後日輸入会社の費用で横浜に廻漕されたことに対する損害賠償請求であった<sup>8)</sup>。裁判は、被告ノーベル劇発薬会社が勝訴している。この記事は、ノーベルのダイナマイト会社が同紙に登場した最初の事例と考えられる。

さらに、1897年1月には、「ダイナマイトの発明者ノベル氏ハ学術研究の為に万国共同資本の組織を設けんと欲し其巨額の資財の全部を寄付せり（一月二日倫敦発）」との短い記事がある<sup>9)</sup>。これに示されるように、ノーベルの遺言はノーベルの死後、早い段階で日本に伝えられたことがわかる。

このノーベルの遺言に関して、より詳しい情報が東京帝国大学の学術雑誌『国会学会雑誌』1897年4月号に掲載されている<sup>10)</sup>。「此頃死亡セルアルフレッド、ノーベル氏ノ遺産処分法ノ如キハ曾テ聞カサル所ナリ氏ハ瑞典人ニシテ『ダイナマイト』ノ営業ヲ為シ広ク諸国ニ知ラレタリシガ其所有金約二百万磅ヲ学術奨励ト万国平和ノ進歩ノ為ニ費ス可キ旨ヲ遺言シテ逝ケリ」と指摘し、ダイナマイトの営業で広く知られたスウェーデン人、ノーベルがかつて聞かない遺産処分法で、その財産約200万ポンドを学術奨励、万国平和の進歩のために費やす旨の遺言を遺して亡くなったと伝えている。これに続けて、毎年前記資金により生ずる利子約6万ポンドを5つに分け、贈与することを説明している。具体的に5分野が列挙されているが、3つ目と4つ目に「生理学又ハ医学」が2回登場し、「文学」が抜け落ちている。これは、単純な誤植と考えられる。4つ目の「生理学又ハ医学」は「文学」の誤りであろう。5分野には授与の対象となる活動もそれぞれ記されている。たとえば、5つ目については「世界ノ平和ヲ進歩スルニ於テ最有力ナル事ヲ為シタル者」とされている。その上で、最後に「此贈与ハ国籍ノ如何ヲ問ハズ撰定ニ当リタル人ニ歸スル筈ナリト云フ」と結ばれ、国籍に関係なく贈与されることにも触れている。

以上のように、単純な誤りはあるが、ノーベルの遺言の要点がまとめられている。各賞の説明において、遺言の文言そのものが紹介されているわけではないため、外国の紹介記事を翻訳、転載したものと考えられる。金額の表記がポンドとあるため、イギリス経由の情報の可能性が高い。いずれにしても、ノーベルの死後、4ヵ月ほどの時期に、その遺言が詳しく紹介されていることから、ノーベルの遺言は日本人の間でも関心も呼び起こしたと考えられる。

『国家学会雑誌』は、1897年6月号に岡田良一郎（1839～1915年）の「アルフレッド、ノーベル氏ノ遺産処分法ニ就テ」との論説も載せている<sup>11)</sup>。これは、先の同誌記事に刺激を受けた遠江国報徳社社長の岡田が、自分の所属する報徳社の活動をノーベルの遺言と対照して優劣を論評することを意図したものであった。しかし、ノーベルの上記遺言だけで実体がない段階では、報徳社の支援活動（農業、商業など実業に従事する者への褒賞金の付与など）を紹介して終わっている。岡田は、論説末尾に「余レ老ヒタリト雖モ亦将ニ奮起スル所アラントス」と記しており、ノー

ベルの遺言から刺激を受けたことは確かであろう。

1900年にノーベル財団が発足し、1901年以降、ノーベル賞が実際に授与されるようになる。しかし、日本の新聞には毎年のノーベル賞受賞者を詳しく報道する動きは当初なかった。まず読売新聞は、1901年の文学賞受賞者についてノーベルの設けた「懸賞授与者」としてフランスの詩人、シュリ・プリュドム（1839～1907年）が受賞したことのみに伝え、他の受賞者については言及していない<sup>12)</sup>。同紙がノーベル賞受賞者を次に報道したのは、1905年の各賞受賞者であった。ベルリン経由の情報として、同年のコッホ（1843～1910年、生理学・医学賞）ら全受賞者の名前を記し、「ノーベル賞金」を授けられたと報じている。平和賞のベルタ・フォン・ズットナー（1843～1914年）については「シエツトチルの教授ベルタール」と報道している。1906年にアメリカのセオドア・ローズヴェルト大統領（1858～1919年）がノーベル平和賞を受賞した際も、報道されている<sup>13)</sup>。朝日新聞においては、ノーベル賞受賞者の最初の紹介は、1905年のコッホらの受賞を報道したものであり、それに続くのは1906年のローズヴェルト大統領の平和賞受賞を伝える記事であった<sup>14)</sup>。こうしてノーベル賞受賞者が報道されることが常態化していったのである。

雑誌論文では、様々な団体がノーベル賞に興味を示していたことがわかる。まず1905年4月の『慶應義塾学報』に「ノーベル賞典」という記事があり、早い段階でノーベル賞の紹介を試みている<sup>15)</sup>。同記事は、「ノーベル賞典と云ふ文字は能く見受けませんが、その如何なる性質のものなるやを明にせざる人がないとも申されぬから聊か説明を加へませう」との文章で始まり、ノーベルの経歴、1901年から1904までの平和、文学、医学、物理学、化学の各賞受賞者の一覧を掲示している。それに続き、各賞受賞者の経歴、研究について紹介をしている。最後に、1904年までの受賞者の国別の表を作り、多い順に列挙している。2名の受賞者が賞を分け合った時は「半賞」として0.5点で計算している。これによれば、受賞が多い国はドイツ、イギリス、フランスといった順番になっている。この表を受けて、記事は最後に以下のように結んでいる。すなわち、「而してこの表に現はれました如く亜細亜阿弗利加両大陸は勿論米国からも未だ一人の受賞者をも出して居りませぬ。どうか戦勝の結果学芸の上に於ても大に日本の光輝を発揮して続々ノーベル賞典の受賞者を輩出せしめ度いものです」と述べ<sup>16)</sup>、アジア、アフリカ両大陸、アメリカから受賞者が出ていない状況を指摘し、日本からも受賞者を輩出させたいとの希望を出している。この記事は短いものではあったものの、ノーベル賞の4年間の活動実績を概観し、日本とのかかわりにも触れた点、また教育機関がノーベル賞に関心を示した点で大変興味深い。

次に、奉公会という団体の発行する雑誌、『奉公』の1906年11月号が「奉公上より見たるノーベル氏の賞金遺贈」との記事を載せている<sup>17)</sup>。著者の「水原子」は、大阪朝日新聞がアメリカ雑誌コスモポリタンに基づいてノーベル賞に関する記事を載せたのをみて、ノーベルの賞金遺贈について「寂然たるものあり」と感じ、同記事を転載しつつ、コメントを加えたのであった。その中で1901年から1905年までの各賞の受賞者を概観している。最後に、奉公の重要性を説く団体



の会員たる著者は、奉公という観点からノーベルの活動について以下のように述べている。「……今ア〔アルフレッド・ノーベル〕氏の所行を見るに、果して此旨に合ふあり、ア氏が一介の身を以て、能く天地の公に奉ずる所以の実を著はしたるは、又偉なりとせざるを得ず、世の富豪たるもの、宜しくア氏の所行に省みて可なり」、「……吾儕はア氏の所行に見て、今日に忸怩たるものあり、敢て之を世の富豪家に一顧の労をとられんことを希望して止まざるなり」と述べ、ノーベルの行動を評価し、世の中の富豪もこれを省みるよう求めている<sup>18)</sup>。まさに道徳的な観点からも富豪ノーベルの遺産の遺し方は好意的な評価を受けたのである。

その他、外交雑誌の『外交時報』がノーベル平和賞を取り上げている。国際法学者の有賀長雄（1860～1921年）は、「半月外交史」という同誌連載記事で1906年にローズヴェルト米大統領が、1907年にはフランスの「ルノール博士」（1843～1918年）とイタリアの「テオドロ、モネタ」（1833～1918年）が受賞したことを報じている<sup>19)</sup>。さらに有賀は1910年にはドイツ皇帝にノーベル賞金を授与しようとの風説がベルリン、パリで出ていることを伝えている<sup>20)</sup>。また、医学関係の雑誌『治療薬報』にも1907年に「ノーベル賞牌」というノーベル賞紹介記事が載っている<sup>21)</sup>。このように、ノーベル賞各賞は各専門分野の雑誌でも取り上げられることになった。

ノーベル賞の推薦について正式な情報提供が1910年以降、政府の『官報』上でもなされている<sup>22)</sup>。これはノーベル平和賞についての推薦締め切り、推薦有資格者、推薦状宛先などを扱ったものである。ノルウェー・ノーベル委員会が毎年、翌年度のノーベル平和賞推薦について世界各国の関係者に送付している回章を日本政府が受け取り、文部省がその内容を翻訳、公表したものである。

以上のように、1910年頃までにノーベル賞についての情報は日本人の間にも広がり、確実に蓄積されていったのである。ただ、ノーベル賞の呼称については、様々なものが存在した。「ノーベル賞典」、「ノーベル賞金」、「ノーベル賞牌」などである。上記の『官報』には「平和賞金懸賞」という用語もみられる。特に、「ノーベル賞金」という呼称はその後も長く使われた。受賞者に多額の賞金が分配されることから、「賞」というよりも「賞金」が注目されたためであろう。

## （２）新聞における紹介の全体的傾向

1900年から1945年<sup>23)</sup>までの間、朝日新聞にノーベル賞関係の記事が掲載された件数を統計的に考えてみたい。朝日新聞の記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル<sup>24)</sup>によれば、この期間、以下のような記事件数となった。ノーベル賞には各賞に限定されない様々な記事があるため、各賞の件数を合計しても、ノーベル賞の件数にはならない。

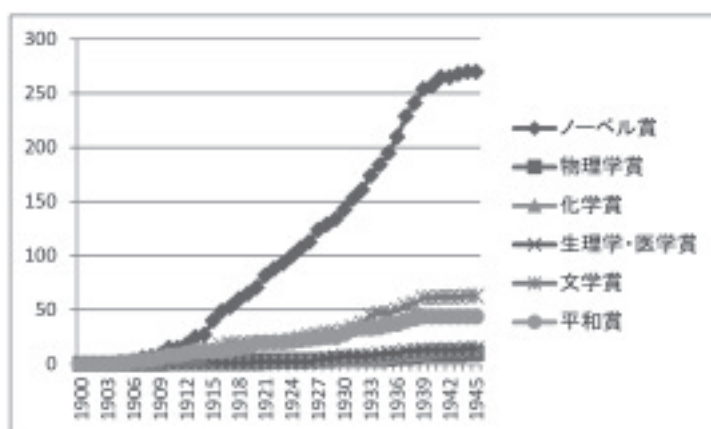
ノーベル賞	270件
ノーベル物理学賞	10件
ノーベル化学賞	14件
ノーベル生理学・医学賞	14件

ノーベル文学賞 63件

ノーベル平和賞 44件

件数から判断すると、第二次世界大戦以前には文学賞、平和賞の報道が多く、それに比べると、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞は少ない。新聞に関していえば、自然科学分野のノーベル賞よりも、人文、社会科学分野への関心が高かったといえよう。自然科学分野の受賞者の研究は、専門性が高く、細かい紹介は新聞になじみにくかったと考えられる。1900年から1945年までの間、物理学賞、化学賞、生理学・医学賞とも数年おきに1件あるいは2件の報道がみられるだけであった。それに比べれば、文学賞、平和賞に関する情報は、理解しやすく、広く一般読者の関心に沿うものであり、件数を伸ばしている。

次に、図1はノーベル賞関連記事数の累計数を賞別に示したものである。ノーベル賞については、1900年代と1940年代は伸びがなく、記事が少なかったことがわかる。1900年代は、第1節でも取り上げたように、日本でようやくノーベル賞が知られ始めた時期であり、記事も限られていた。1940年代は、第二次世界大戦の影響でスウェーデン、ノルウェーでノーベル賞選考が中断した時期であり、情報数自体が減少しており、日本でも戦時体制の下でノーベル賞に関して自由に報道できる態勢にはなかったと考えられる。それに対して1910年代から1930年代は、着実にノーベル賞に関して記事が掲載されたのである。特に、1930年代はそれ以前に比べ、記事件数が増加したことが図にも示されている。この時期、ノーベル賞に注目が集まったということができよう。個別の賞についてみると、上記の通り自然科学分野の3賞は件数が極めて少ないため、横軸にほぼ接するような形でゆっくりと増えている。それに対して、文学賞と平和賞は徐々

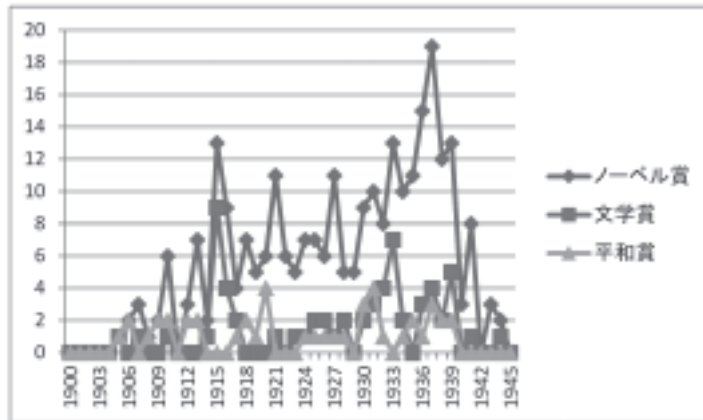


註 ノーベル生理学・医学賞については、生理学・医学賞、医学賞の結果を合算した。各賞の数字を合計しても、ノーベル賞の数字にはならない。1945年は、8月15日までの期間を対象にした。

出所 朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアルにより筆者作成。

図1 朝日新聞記事データベースにおけるノーベル賞関連記事数累計 1900-1945年





註 1945年は、8月15日までの期間を対象にした。  
出所 朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱビジュアルにより筆者作成。

図2 朝日新聞記事データベースにおけるノーベル賞・文学賞・平和賞記事数 1900—1945年

に件数が増え、1930年代以降、文学賞が平和賞を上回っている。文学賞関連の記事数が増えたことがわかる。

図2は、ノーベル賞関連記事の年ごとの件数を扱っており、年による増減をより細かく示したものである。自然科学分野の3賞は件数があまりにも少ないため、図の上で差異を示すことが困難なため、図ではノーベル賞、文学賞、平和賞の3つの指標について年ごとの記事数を示した。どの年に記事が多かったかがわかる。記事の内容にも触れつつ、多い年の理由を考えてみよう。

ノーベル賞に関する記事の動向をみると、10件以上の年は、1915年、1921年、1927年、1931年、1933年、1934年、1935年、1936年、1937年、1938年、1939年の11年となり、1930年代に集中している。文学賞、平和賞の記事が多い年と重なることが多い。では、個別にいかなる記事が多かったか、その内容をみてみよう。1915年は、1913年にノーベル文学賞を受賞したインドのタゴール（1861～1941年）が来日することになり、その関係の記事が多い。1915年3月に来日を予定していたが、同年秋に延期され、最終的に同年の来日は中止された。結局、タゴールは翌年来日している。1921年は、文学賞受賞のアナトル・フランス（1844～1924年）をはじめ、各賞の受賞者などの紹介記事が多い。1927年は、ノーベル文学賞受賞者の作品を集めた全集『ノーベル賞文庫』の企画を宣伝する広告が多いため、全体の件数が多くなっている（『ノーベル賞文庫』については、第2章で紹介する）。1931年は前年のノーベル文学賞受賞者のルイス（1885～1951年）や同年の受賞者カールフェルト（1864～1931年）に関する報道、平和賞受賞者の予想と受賞者に決まったアダムズ（1860～1935年）についての報道により、記事が多い。1933年から1939年までは毎年連続して10件以上の記事数になっているが、文学賞、平和賞以外に、自然科学分野の受賞者についても紹介する記事が多くなっている。1937年は19件と最も記事件数の多い年であるが、各賞に関連する報道がバランスよくなされ、

その中では同年に文学賞を受賞したマルタン・デュガール（1881～1958年）についての記事が多い。

以上のように、第二次世界大戦以前の新聞報道は、1910年代から1930年代までは順調に増えたことがわかる。その中心は文学賞、平和賞関連の記事であった。1930年代は自然科学3賞に関する記事も増加している。しかし、こうした増加は、第二次世界大戦の勃発で止まり、1940年以降はノーベル賞に関する新聞報道は限定的なものとなったのである。

## 2 第二次世界大戦以前の図書にみるノーベル、ノーベル賞紹介

第1章においてアルフレッド・ノーベル、ノーベル賞について新聞、雑誌でいかなる紹介がなされたか、概観した。本章では、伝記などの図書の出版がいかなる状況にあったか、考察する。表1は、第二次世界大戦以前のノーベル伝記・ノーベル賞関連書の出版状況を一覧にしたものである。文献の一部でノーベル、ノーベル賞を紹介したものは取り上げたが、各受賞者に特化したものは省いた。第二次世界大戦以前に約40冊の図書が出版されたことがわかる。本章でそのすべてを紹介することはできないため、1900年代、1910年代～1930年代、1940年代の3つの時期に区分して、主要な伝記、また短くても特徴のある文献を選び、内容をまとめる。3つの時期は、出版の状況とその内容から便宜的に分けた。第1期の1900年代はノーベル、ノーベル賞に関して紹介が始まった時期である。第2期の1910年代～1930年代は紹介の件数が拡大し、内容的に深化した時期である。第3期の1940年代は1930年代までの紹介の集大成として本格的な伝記が出て、紹介が成熟をみせるとともに、戦時体制下で紹介の内容に変化が生じた時期である。

### （1）第1期 1900年代：紹介のはじまり

#### ①藤井宇平『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』の背景

第1章でみたように、ノーベル賞が創設されて10年しない1900年代には新聞記事も限られていたが、この早い段階でノーベルについて最初の伝記が出版されている。国会図書館の蔵書データベースによれば、ノーベルに関する日本初の伝記は、1909年3月に世界最良書普及会の藤井宇平（生没年不明）が出版した『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』である<sup>25)</sup>。173頁に及ぶ同書は、スウェーデンを簡単に紹介した上で、ノーベルの事業を父の代から説明し、ノーベルの性格、考え方に触れた後、最後に遺言に基づくノーベル賞についてまとめた著作である。初の本格的ノーベル伝ということで、いかなる点が紹介されたのか、その内容を詳しく整理しておきたい。なお、同書の発売については、世界最良書普及会名で事前に新聞広告が出されていた。1908年12月の『読売新聞』、『朝日新聞』の広告によれば、近日発行、定価金一円とされ、申し込みを募っており、内容については「本書は爆烈薬の大王世界平和の木鐸ダイナマイトの発明家ノーベル賞金の創立者たる真偉人の事業及び性行を詳説す」と記していた<sup>26)</sup>。

ノーベル賞の国際政治学

表1 第二次世界大戦以前のノーベル伝記・ノーベル賞関連書出版状況

著者／訳者	書名（シリーズ名）	出版社	発行年月日	備考（対象、該当頁、見出し）
藤井宇平	世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳	世界最良書普及会	1909年 3月31日	成人用、全173頁
佐多愛彦	校舎の窓より	杉本梁江堂	1914年 3月 5日	成人用、30～32頁、「ノーベル賞金の授与法」
池田林儀	将来の日本と実業の青年	楽寿堂出版部	1919年 1月 1日	成人用、274～328頁、「世界的実業家」
日本青年教育會編	科學の偉力（公民文庫）	日本青年教育會	1919年 4月30日	成人用、170～174頁、「罪滅しのノーベル賞金」
堀七藏	文化のさきがけ 発明家と発 見家（少年少女常識叢書）	文洋社	1924年 6月 5日	児童用、1～26頁、「ノーベル賞金と恩賜賞」、「アルフレ ッド・ノーベル」
及川久太郎	兒童の電氣学（学習資料百科 全書）	東洋図書	1926年 6月10日	児童用、172～176頁、「ノーベル賞の話」
神戸市立湊川商工実習学 校	湊川常識講座 第1輯	神戸市立湊川商工実習 学校	1926年 6月19日	成人用、40～44頁、「ノーベルの話」（見出し下に「堀七藏 氏の文に依る」とあり）
池田林儀	飛躍する才魂	文友社	1926年10月 4日	成人用、86～92頁、「ノーベル賞金」
大日本國民修養會	世界富豪体験真理成功秘訣講座	日本書院出版部	1927年 7月 5日	成人用、99～114頁、「ノーベル賞金の創設者ノーベル（瑞 典）」
石川寅吉編	西洋偉人傳（小学生全集）	興文社・文藝春秋社	1928年 4月30日	児童用、154～167頁、「ダイナマイトの発明者ノーベル」
中西芳朗	偉人美談	コドモ藝術学園講演部	1930年 1月15日	児童用、65～96頁、「ノーベル」
大山廣光	新編偉人物語 努力の人々	文教書院	1930年 9月 8日	児童用、102～106頁、「ノーベル賞金（ノーベル）—ダイナ マイトの発明—」
野澤嘉哉	大成功者出世の緒口	晟高社	1930年 9月10日	成人用、420～433頁、「爆薬王ノーベル」
栗原登	子供のための発明発見家物語	文化書房	1931年 6月15日	児童用、189～221頁、「ダイナマイト王ノーベル」
高橋學而	近代科學の偉人並發達略史	四條書房	1932年 2月 8日	児童用、199～203頁、「ノーベル先生」
松井宗一郎	少年ニュートン傳	文化書房	1932年 5月20日	児童用、317～325頁、「附録〔二〕ノーベル賞金」
高橋元一郎	平和と子供	教文館	1932年 6月24日	成人用、87～88頁、「ノーベル平和賞」
野邊地天馬	大科学者物語	婦人之友社	1932年12月15日	児童用、152～163頁、「ダイナマイトの発明者 アルフ レッド・ノーベル」
野澤嘉哉	趣味の立志傳	明治図書出版協會	1933年 4月17日	成人用、420～433頁、「爆薬王ノーベル」、1930年の「大成 功者出世の緒口」の内容と同一
寮佐吉	近代科學の驚異	中央公論社	1934年 5月23日	成人用、213～217頁、「パイナツプルとノーベル賞金」
吉松虎暢	科學界の偉人	実業之日本社	1935年 7月10日	児童用、353～361頁、「ダイナマイトを発明した化学者アル フレッド・ノーベル」
松平道夫	世界科學發明物語	日本公論社	1936年10月25日	成人用、211～215頁、「ダイナマイトの発明者ノーベル」
日本學術振興會訳	ノーベル賞ニ関スル諸規定 （附）ノーベル協會一九三六年 度事務會計報告	日本學術振興會	1937年12月	成人用、全44頁・22頁
松平道夫	万人のための科學史	日本公論社	1939年 2月25日	成人用、211～215頁、「ダイナマイトの発明者ノーベル」、 1936年の「世界科學發明物語」普及版とあり、内容は同一
宮道馨	理化學史物語	東洋図書	1939年 4月23日	成人用、126～134頁、「ノーベルとノーベル賞」
野澤嘉哉	趣味の立志傳	有紳堂	1939年 5月15日	成人用、420～433頁、「爆薬王ノーベル」、1933年の同名書 籍の内容と同一
林癸未夫	天邪鬼	人文書院	1939年 9月 5日	成人用、199～205頁、「ノーベル賞」
藤原三日男	病苦を克服した人々	土肥書店	1940年 2月27日	成人用、123～126頁、「病が齎す寶玉—発明家ノーベル、 思想家バスカル、進化論の泰斗ダーウイン—」
呉建	池の素描	文藝春秋社	1940年10月20日	成人用、54～57頁、「ノーベル医学賞に関する授賞事情」
樋口麗陽	世界富豪成功秘訣講話	天泉社	1940年11月30日	成人用、99～114頁、「ノーベル賞金 創設者ノーベル（瑞 典）」、1927年の「世界富豪体験真理成功秘訣講座」の内容 と同一
前田河廣一郎	世界偉人美談	非凡閣	1941年10月10日	成人用、70～72頁、「ノーベル賞の創設者 アルフレッ ド・ノーベル」
佐藤道雄	困苦に打ちかつた人人（興亜 少年少女文庫）	興亜書局	1941年12月10日	児童用、210～222頁、「ノーベル父子」
有馬宏	トンネルを掘る話（少國民の ために）	岩波書店	1941年12月15日	児童用、73～77頁、「ノーベル」、1942年 2月10日に改訂第 1刷発行
西澤勇志智	ノーベル兄弟（近代科學者傳）	朝日新聞社	1941年12月25日	成人用、全314頁
白川巖	科學史創造の偉人	山雅房	1942年 3月15日	成人用、283～290頁、「アルフレッド・ノーベル」
江口芳樹	文明を築いた人々	青年書房	1942年 6月20日	児童用、295～303頁、「火薬界の巨人ノーベルと下瀬雅 允」
横尾榮	ノーベル傳	富山房	1942年 7月 8日	成人用、全307頁、同書には湯川秀樹の物理学賞受賞を加 筆した再版がある（1949年12月10日発行）
R・ゾールマン、H・シュ ツク／菊池武一訳	大ノーベル傳	東峰書房	1942年 7月27日	成人用、全457頁
松平道夫	大發明家の話 第3輯	金の星社	1942年 8月25日	児童用、129～196頁、「アルフレッド・ノーベル（ダイナ マイトの發明）」
高橋學而	近代科學の偉人並發達略史	紙硯社	1943年 3月20日	児童用、199～203頁、「ノーベル先生」、1932年の同名書籍 の内容と同一
高木六郎	使用解説火薬	有象堂出版部	1943年 6月15日	成人用、50～68頁、「ダイナマイトとノーベル」
横山夏樹	輝く靖國物語	太平書房	1944年 5月29日	児童用、209～220頁、「爆発火薬と大科学者—ノーベル平 和賞金—」

註 筆者が現物を確認できた図書のみを取り上げ、雑誌記事は除外した。また、ノーベル賞受賞者に関するものも除外した。備考欄の児童用、成人用の区別は明示がない場合、文体、内容などに基づき便宜的に分類した。  
出所 国会図書館蔵書データベース上にある文献から筆者作成。

まず同書を出版した世界最良書普及会とは、「吾人の目的は世界の文学中最良の書を選んで著述、編纂、翻譯、翻刻等の方法に由り、邦文を以て之れを世に紹介し、其の普及を図かるに在り」<sup>27)</sup>と掲げた団体であり、世界の最良書を逐次出版しようとしていた。その団体がまず紹介しようとしたのが『ノーベル傳』であった。序において、同書は「近時、我邦は欧亜の二大国と空前の大戦争を為し、共に之れに勝ちて大に雄名を世界に轟かせり。然れども文事有る者は武事有る如く、武事に優さる者は亦文事に於て人後に落つべからず」と述べ<sup>28)</sup>、日清戦争、日露戦争に勝利した日本として武事に加えて文事もますます発達させる必要性を主張している。

これに続けて、同書の序は「殊に平和の技術の社会に必要なことは戦争の術に勝されり。世に戦争無しと雖ども社会は能く生存す、国に平和の技術無ければ国家は一日も生存すること能はざるなり。而して武力も亦平和の術に頼るにあらざれば、永く戦勝を持続すること能はざるなり。然らば吾人は将来平和の技術を益々発達せしめざる可からざるや明かなり。而して平和の技術の発達は之れを発明家及び事業家の輩出に待たざるべからず、而して此種の人は今日の我邦に於て特に最も必要なものとす。夫の有名なるダイナマイトの発明家アルフレッド・ノーベルは此関係に於て吾人に卓絶なる実例を供するものと云ふべし。是れ吾人が世界最良書普及会刊行書の第一として氏の事業及び経歴を世に紹介する所以なり」と記し<sup>29)</sup>、平和の技術を発達させるため、発明家、事業家が日本にとって必要とされており、その卓絶なる実例としてアルフレッド・ノーベルを挙げ、その事業、経歴を紹介しようと思図したのであった。「戦争の術」よりも「平和の技術」を学ぶ材料としてノーベルを取り上げた点は、興味深い。

同書の出典については、参考文献リストはなく、序に以下の説明があるのみである。「本書はノーベル会の編纂委員によりて公にせられたる『ノーベル賞金』と称する報告書中、瑞典国ウプサラ大学化学教授クレウエ博士の筆に成る『アルフレッド・ノーベルの生涯及び事業』と題する文章を基礎とし、傍ら雑誌『十九世紀』に掲載せられたるヘンリー・デ・モーゼンタール氏の『ダイナマイトの発明家』と題する論文を参酌し、尚ほ其他一般瑞典に関することは同政府最近の刊行に係る『瑞典』と称する大巻の書に拠り、又之れに稍々卑見を加へて記述せるものなり」とある<sup>30)</sup>。ノーベル、ノーベル賞については、主として「ウプサラ大学化学教授クレウエ」と「ヘンリー・デ・モーゼンタール」の2名の論文に依拠していることがわかるが、引用部分以外に詳しい書誌情報はない。

筆者の調査によれば、「クレウエ」の論文とは、ノーベル財団が毎年刊行し始めた年次報告書『ノーベル賞』の創刊号、1901年号所収のクレウエ「アルフレッド・ノーベル、その生涯と事業」(仏語)である<sup>31)</sup>。クレウエ(1840～1905年)は、ウプサラ大学の化学の教授であり、ノーベル化学賞の選考委員会委員長(在任1901～1905年)も務めた人物であった<sup>32)</sup>。他方、「ヘンリー・デ・モーゼンタール」の論文とは、ロンドンで発行されていた月刊誌『19世紀』1898年10月号所収の「ダイナマイトの発明家」であることが確認できた<sup>33)</sup>。デ・モーゼンタール(1850～1912年)は、南アフリカ生まれの人物であり、ノーベル・ダイナマイト会社創立以来、同社の技術秘書を務め、ノーベルとともに働き、爆発物の研究で同産業の発展に貢献したとされる<sup>34)</sup>。ノー

ベルの傍らで彼とその事業をよく知る人物であったといえよう。以上の2論文は、ノーベルとノーベル賞に関して当時入手できる最も信頼できる文献であり、それが基本的に翻訳、要約されてノーベル伝になったと考えられる。

## ②藤井宇平『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』の内容

同書は「緒言」、「前編 ノーベルの系統及び事業」、「後編 ノーベルの経歴及び性行」の3部に分けられている。まず「緒言」は簡単にスウェーデンを紹介し、古来英雄豪傑を出し、さらに科学者、哲学者、発明家を輩出し、その一人にノーベルもいることを指摘している。また、ノーベルがダイナマイトを発明したことで、スウェーデンが「世界に於ける爆発物の本場」となったこと、その完全なる爆発物の発見により敵軍を全滅させることができるようになった結果、文明国は戦場より退去することになるとノーベルが考えていたこと、その爆発物より得た巨万の財産で人類に貢献した者に年々賞金を与える遺言をしたことに触れている。同書は、ノーベルが「平和の最熱狂なる使徒」になったというクレーヴェ教授の言葉も引用している<sup>35)</sup>。

「前編 ノーベルの系統及び事業」は、ノーベル家の家系について触れた後、父エマニュエル（1801～1872年）が技術者としてロシアで機雷などを開発したため、アルフレッドら家族もロシアに渡ったこと、父の会社が傾いたことで、スウェーデンに帰国したこと、ノーベル父子はイタリア人ソブレロ（1812～1888年）の発見したニトログリセリンに注目し、それを使った新爆薬の開発を続けたこと、実験中の爆発事故で弟を亡くしたこと、その後も開発を続けた結果、ニトログリセリンと珪藻土を使い、「実に文明の歴史に於て一大時期を画せり」ダイナマイトを発明したこと、アメリカ、ヨーロッパにダイナマイトの製造工場を次々に建設したこと、改良を続けた結果、最も完全なる爆発薬、護膜ダイナマイトの開発に成功したこと、さらに軍用に供する無煙火薬も発明したこと、模造品の出現により特許をめぐる訴訟を多く抱えたこと、アルフレッドの兄ルードウィヒ〔ルードヴィグ、次兄一筆者、以下同様〕（1831～1888年）はロシアに残り、石油事業を成功させたことなどが触れられている<sup>36)</sup>。以上の簡単な項目だけからも、同書がノーベル一族について一通り紹介をしていたことがわかる。

「後編 ノーベルの経歴及び性行」は、アルフレッド・ノーベルに焦点を当てた紹介を行っている。ノーベルが1833年10月21日にストックホルムで生まれたこと、虚弱、多病で小学校には1年しか在学しなかったこと、ロシアに渡ってからも健康不良で勉学を中止することもあり、父の工場で働きながら発明に感ずることがあったこと、17歳から21歳まで機械の勉強でアメリカに送られたこと、スウェーデン語、英語、ドイツ語、フランス語に精通していたこと、ロシアに戻り、熟練技師、発明家として当初は機械工学に関心をもっていたこと、父とともにスウェーデンに戻ってからは、ニトログリセリンの実験を始め、死に至るまでこれに従事したこと、40歳になり、成功をおさめ、その爆発薬を全ヨーロッパに売り、アメリカに工場を設立したこと、フランスに移り、パリ、スヴラン＝リヴリーに実験所を設け、助手とともに実験に従事したこと、モー



ゼンタールがノーベルの邸宅を訪問し、愉快なる時を過ごしたこと、兄のルードヴィヒ〔ルードヴィグ〕が死去した際、アルフレッドの死去と誤報され、讃辞とともに攻撃も受けたこと、実験所の危険性などからフランスで批判が強まったために、1891年にフランスを去り、イタリアのサンレモに居を移し、同地で実験を続けたこと、1892年にはスウェーデンのボーホルス〔ボフォーシュ〕の大砲工場を買収し、広大な実験所を建設したこと、ノーベルは生涯に129個の特許を得たこと、1896年に兄ロベルト〔ローベット〕が亡くなり、同年12月10日にはアルフレッドもサンレモにて死去し、葬儀は12月29日にストックホルムで行われたことが紹介されている<sup>37)</sup>。

この記述の後、ノーベルの性行についても出典の1つ、モーゼンタールの論文を引用しつつ触れている。ノーベルは強固なる意思、無限の精力、稀代の忍耐力をもち、いかなる危険をも恐れず、いかなる困難にも屈しなかったこと、諸国の言語に通じ、書簡、談話にも長じていたこと、非常に大胆家であると同時に非常に神経家であり、冒険家であったこと、事務能力が高く、遺言書も法律家の補助を求めなかったこと、極めて勤勉の人であり、労働を尊敬したこと、子孫に巨額の財産を残すことを不当と考えていたこと、終生結婚しなかったこと、親孝行であり、兄弟とも仲良く、兄らのロシアにおける石油事業には多額の資金を提供したこと、文学を好み、詩人のバイロンを愛読し、自ら詩や戯曲を執筆したこと、博愛の人であり、他人の計画に賛助したり、公益の事業、慈善のために寄付などもしたこと、平和を愛し、オーストリアのストナー夫人〔ベルタ・フォン・ズットナー〕を支援したことなどが触れられている<sup>38)</sup>。

最後に、同書はノーベルの遺言とノーベル賞の設立についても詳細に紹介している。その際、「ノーベル賞」とは思わず、「ノーベル賞金」という用語を使っている。同書は、ノーベルが空前絶後の遺言をしたこと、親族などの分を除く財産で基金を作り、その利子を人類のために最大の功労ありたる者に分配すること、5つの分野とその資格、選定者についても触れ、1901年より授与が始まったことなどを説明している。その上で、巻末にモーゼンタールの言葉を引用し、いかなる記念碑もノーベルには及ばないと述べ、ノーベルを高く評価して同書は終わっている。すなわち、「然れどもモーゼンタール氏の言へる如く、如何なる記念碑と雖ども、之れを夫のノーベル自身が文明の進歩、人類の幸福の為に設立したる廣大無邊にして且つ永遠無窮なる記念碑に比すれば、亦言ふに足らざるなり。噫！」<sup>39)</sup>。

以上、日本初のノーベル伝の内容を要約したが、ノーベル、ノーベル賞について断片的な情報しかない時代において基本的情報を網羅した内容であったことがわかるであろう。前述のように出典の文献を要約しただけであったと考えられるが、利用した文献がノーベル、ノーベル賞について極めて信頼の足るものであったため、このノーベル伝自体も水準の高いものになっている。それまでノーベル、ノーベル賞について情報が限られている中で1冊の伝記が出版された意義はあろう。日本でこれに続く多くの文献は参考文献を明記していないが、これが種本の1つになったのではないかと推察される。

なお、このノーベル伝について、当時の新聞に短評が載っているが、好意的な見方と批判的な



見方に割れている。すなわち、『朝日新聞』は6行の紹介で「……此書は体裁の割合に内容が少ない定価一円は甚だ高い十五銭位の袖珍本で沢山である」としている<sup>40)</sup>。ハードカバーの高価な本にもかかわらず、活字が大きく、情報量が少ないため、安い小型本で十分であるという批判であろう。他方、『読売新聞』は5行の紹介で「……世にダイナマイト王として知られたるアルフレッド、ノーベルの傳記なり読んで青年を激励するに足るものあるべし」と記し、内容を評価している<sup>41)</sup>。

## (2) 第2期 1910年代～1930年代：紹介の拡大と深化

上記の伝記が刊行された後、1910年代以降、部分的にノーベルを扱った文献が多数続いた。分量は、数頁のものから数十頁のものまで様々である。これらの文献のタイトルからもわかるように、各文献は多数の偉人を取り上げ、その一人としてノーベルにも触れたものが多い。その際、「世界的実業家」、「富豪」、「大成功者」、「爆薬王」、「大科学者」、「大発明家」など様々な切り口からノーベルを捉えている。弟を爆死で失うなど、苦勞の多い実験の末にダイナマイトをはじめとする爆薬を次々に発明し、企業家として経営手腕を発揮して巨万の富を得て、死に際しては遺言によりその遺産の大半に基づきノーベル賞を創設させたノーベルの人生は、まさに世界中の人が注目する「偉人」の典型的事例であった。これらの紹介を通じて、ノーベルとノーベル賞の存在は徐々に日本人の間に定着していったと考えられる。図書は成人用のものと児童用のものが半々ぐらいのペースで出版されており、子供から大人まで幅広い層にノーベルが定着することになった。こうした状況が1920年代、さらに1930年代も続くのである。特に1930年代はノーベルに関して多数の図書が出版されている。すでにこの時点でノーベル、ノーベル賞の知名度は日本で極めて高かったと推測される。紙幅の都合でここでは3点の文献を取り上げよう。

### ①堀七蔵『文化のさきがけ 発明家と発見者』の内容

ノーベルについての文献には成人を対象にしたもののみならず、児童を対象にしたものも含まれる。その最初期のものは、1924年に堀七蔵（1886～1978年）が出版した『文化のさきがけ 発明家と発見者』である<sup>42)</sup>。著者の堀は当時、東京女子高等師範学校教諭を務めており、理科教育について多数の著作を出した人物である。同書は「少年少女常識叢書」の1冊であり、ノーベルをはじめレントゲン、キュリー夫人、ダーウィン、メンデル、パスツール、コッホなどの発明家、発見者を取り上げたものである。

同書の冒頭には叢書を企画した常識普及会による「はしがき」がついている。すなわち、「皆さんが、時計の針の一進毎に、進んで止まない今の世の中に生立つて、後れを取らないやうにして行くには、是非とも広いこなれた知識を吾が物として置かなくてはなりません。課程に迫られる学校ではその知識の源泉たる根本は授けますが、其の他の事までは手が届かないのですから、応用のきくこなれた知識は実地に見聞するか、見聞すると同様によく書きこなされた本によつて

得るより外に方法はありません。ところが諸君は実地に見聞する機会は至つて少く、世には又よく書きこなされた良書に乏しいのです。これはたゞ皆さんの不幸なばかりではなく、社会国家将来の為めにも嘆かばしいことでもあります」と述べ、少年少女が世の中で後れを取らないよう、広いこなれた知識を得るために、良書を提供しようとしたのであった<sup>43)</sup>。

これに続き、著者の堀も「読者諸君に」において、「……過去並に現在生存せる大小無数の天才偉人によりて仕遂げられたものが、吾々に提供せられて吾々の文化生活が出来上つて居ります。之を考へると、吾々は現在の文化生活を楽しむと共に、吾々の文化生活を開拓して下さつた幾多の発見家発明家に深く感謝せねばなりません」と述べ、発見家、発明家に注目する必要性を説いている。それに続けて、「本書は、今日の文化のさきがけをされた発見家発明家の中から僅かの人々を抜いて、聊かその功績を説明したものにすぎません」と述べ、読者がいかなる感想をもつかはあらかじめ期待しないといいつつも、最後には「……是等の大発見家大発明家に刺激せられて、将来読者の中から大研究家を生ずることがあればこの上もない幸であります」と結んでいる<sup>44)</sup>。将来、日本から大発見家、大発明家を生み出したいという強い意志が感じられるのである。

以上のように、同書は少年少女向けの偉人伝という形をとり、取り上げた偉人の一人がノーベルであった。まず第1章「ノーベル賞金と恩賜賞」で、「ノーベル賞金は、世界の文化を進める程の大発明大発見をした人、また世界平和の為に貢献するところのあつた人に対して、毎年多額の賞金を贈与するのであります」と説明した後、5つの賞を紹介している。さらに、受賞者として平和賞を受賞したセオドア・ローズヴェルトに触れている。すなわち、「北米合衆国の大統領ローズヴェルト氏が、明治三十七八年戦役の際に我国と露西亜との間に斡旋して平和条約を結ばしめた功によつて、第五種の平和賞を得た有名な歴史があります」と述べ、日本とのかかわりがある人物が受賞したことに一言触れている。その後、1901年から1921年までの「理学賞」、「化学賞」、「医学賞」受賞者の一覧表を掲げている。それに続けて、著者は、「ノーベル賞金受領者は、広く世界各国の学者にわたつてゐるが、我が国の学者で、ノーベル賞金を受けた人が一人もありません。これは誠に心細い次第であります、将来皆さんの中からノーベル賞金を受ける位の方が、是非出ることを希望するより外ありません」と記し、日本人受賞者がいない現状を伝え、将来の受賞者の出現に期待している。これに続けて、著者は日本の恩賜賞、学士院賞受賞者を列挙し、優秀な日本人科学者が多数いることを読者に印象づけている<sup>45)</sup>。第2章では、ノーベルの簡単な伝記を記している。ダイナマイトなどの爆薬を次々に開発し、巨万の富を得た後、1896年12月10日に63歳で死去したこと、遺言により「ノーベル賞金」が生まれ、「世界最高の名誉を表彰することになった」ことが触れられている<sup>46)</sup>。

堀の著書は、ノーベルのみを扱ったわけではないが、少年少女用の偉人伝の定番としてノーベルを取り上げたさきがけと考えられる。ノーベルら科学者の活躍を伝え、それが刺激になり、将来多数の日本人科学者が生まれることを期待したものである。以後、同様の出版動機をもつノーベル紹介が特に児童用文献において続くことになる。

## ②野邊地天馬『大科学者物語』の内容

1932年に出版された野邊地天馬（1885～1965年）の『大科学者物語』<sup>47)</sup>も、児童用に多数の科学者を取り上げ、その一人が「ダイナマイトの発明者 アルフレッド・ノーベル」であった。

著者は、「はしがき」において「その科学者が、世の中のためにどんな事をしたか、それが私たちにどんな幸福を与えてゐるか、それを知ることは非常に面白いことであります。／私たちが、昔の人々よりも、便利で安楽な生活のできるの、その科学者が苦心して尽してくれたお蔭です。また私たちも、科学が好きになつて、もつと注意深く、この自然を研究するならば、まだまだ〔原文は繰り返し符号〕発見されずにゐる色々な貴いもの、を見つけることが出来るでせう」と述べ、科学者について知り、好きになって、研究することを子供に奨励したのである<sup>48)</sup>。

本文では、ノーベルの生涯をこれまでの文献と同様に簡潔に紹介している。ノーベルの発明については「これらの発明は、戦争に必要な物であるといふよりも、むしろ著しい貢献は、鉱山や土木工事に非常な便利を与へたことでした。ダイナマイトの発明はどんなに世界の文明に大きな助けを与へたものかわかりません」とまとめている。最後に、「ノーベル賞」についても紹介している。同書は「ノーベル賞金」とはいわず、「ノーベル賞」という用語を一貫して使っている。日本についても言及しており、「今のところ日本人はまだ一人もありません、やがては皆さんのうちから、その賞金を受ける人々が起るに相違ありません」と述べ、日本人受賞者の出現に期待を寄せている<sup>49)</sup>。

同書も、他の伝記と同様に児童向けに多くの科学者、発明家を紹介し、その中の一人としてノーベルも取り上げ、高く評価しているのである。ノーベルは、その劇的な人生から、児童に向けた日本の科学技術振興のための貴重なモデルの一人とされたのである。

## ③日本学術振興会訳編『ノーベル賞ニ関スル諸規程、(付)ノーベル協会一九三六年度事務会計報告』の内容

1930年代には、ノーベル、ノーベル賞に関して多数の文献が出版されている。年代ごとにその数は増加している。そのため、ノーベル、ノーベル賞について一定の知識が成人、児童の間で高まったと考えられる。そうした中で、ノーベル賞に関して、公式文書が翻訳されている。1937年12月に出版された日本学術振興会訳編『ノーベル賞ニ関スル諸規程、(付)ノーベル協会一九三六年度事務会計報告』である<sup>50)</sup>。同書は、ノーベル賞が依拠する規程、すなわち「ノーベル財団規程」、「物理及化学賞ニ関スル規程」、「医学並生理学賞ニ関スル規程」、「文学賞ニ関スル規程」、「平和賞ニ関スル特別規程」を翻訳し、さらに付録として「ノーベル財団一九三六年度報告」も翻訳している。ノーベル賞にかかわる規程をすべて翻訳し、冊子の形で出版した初の事例である。翻訳に当たった日本学術振興会は冊子冒頭に出版に関して説明を行なっている。それによれば、「本謄写ハ本会ガストックホルムノノーベル財団ヨリ直接入手セル同財団ノ規程ノ全部及一九三六年度事務並会計報告書ヲ翻訳蒐録シタモノデアル／同財団ハ単ニ授賞ノ機関タルニ

止ラズ特別資金ナルモノヲ設定シテ広く有望ナル研究ニ対シテモ相当額ノ研究費ヲ支出シテキルノデアツテ多少共参考ニナレバ幸デアル」と記している<sup>51)</sup>。日本学術振興会は、スウェーデンのノーベル財団から直接入手した規程などを翻訳したと述べ、さらに財団がノーベル賞を授与するだけでなく、有望な研究に研究費を出している事実もその会計報告から知り、読者に注目するよう促している。

これまで、断片的にはノーベル賞の制度について紹介はなされていたが、そのすべての関係機関の依拠する規程が邦訳されたことは、ノーベル賞を事実に基づき正確に理解するうえで極めて重要な貢献であった。この翻訳がなされた背景には何があるのだろうか。翻訳した日本学術振興会は、日本における学問の振興をまさに目的にしているが、日本からノーベル賞受賞者を出すためにもノーベル賞の仕組みについて詳しく知る必要性があると考えたのではないかと推察される。1930年代中葉には、ノーベル医学賞の日本人推薦をめぐり、壮絶な競争があったことが知られている。1935年のノーベル医学賞選考では東京大学医学部教授の呉建（1883～1940年）と慶應義塾大学医学部教授の加藤元一（1890～1979年）を双方の大学関係者が推薦し、学閥間の競争が激化していた<sup>52)</sup>。まさに、日本人の医学関係者の間でノーベル賞の推薦について関心が高まっていたのである。

これを裏付けるように、呉建東京大学医学部教授の遺稿の随筆が1940年10月に『池の素描』として出版されたが、その中には「ノーベル医学賞に関する授賞事情」という1936年10月の随筆がある<sup>53)</sup>。それによれば、呉は先年ストックホルムを訪問した際、在スウェーデン公使、武者小路〔公共〕子爵<sup>54)</sup>らとともにノーベル医学賞委員会幹事のリリエストランド教授と話す機会を得て、ノーベル賞授賞手続きについて説明を受けたのであった。同随筆では、そのときに得た情報を箇条書きにまとめている。たとえば、「ノーベル賞は成るべく新しい研究に呉れる。古い研究でも最近になつて一般から認められたるものには与へる」、「研究の種類は新発見といふ意味が大切である」、「推薦状の数は問題にならぬ。若しその推薦状が安全有効なるものであれば一票でも十分である」などが記されている。その上で呉は「即ちこの条件に当てはめるやうにして行かなければ如何に良い研究をした人があつても、授賞されないのである。この条件に当てはまるやうにするのは、まづ、これはよいと思ふ候補者を一人と言わず、何人でも出す。そして委員がその人、その研究を追ひ追ひに認めるのを待つより他はない。誰か非常な学者があつても、ノーベル賞委員会が高名を聞いて、賞を貰つて下さいと言つて来るものと思つてもそれは駄目で、さういふ考へでは、何十年たつても日本にはノーベル賞は来ないのである。お互に適当と思ふ人をどしどし推薦して、自分に与へられた推薦権を十分に使はなければならぬ。ただ待つてゐるのみでは何日たつても医学賞は日本には来ないのである」と述べている<sup>55)</sup>。呉は、ノーベル医学賞の選考委員会関係者との会話から、日本人を積極的に何人も推薦をすることが日本人のノーベル医学賞受賞につながるのの教訓を引き出しているのである。

日本学術振興会による規程の翻訳は、ノーベル賞とその受賞者をただ外から称えるのではなく、

日本人も候補になりうるのであり、将来受賞者を出すことを意識したものであったと考えられる。より現実的な対象として、ノーベル賞が意識され始めたことを物語っているといえよう。

### (3) 第3期 1940年代：紹介の成熟と変化

ノーベルに関する著作の出版は戦時体制下の1940年代も続いている。日本は1937年7月から日中戦争を始め、さらに1941年12月には太平洋戦争に突入した。そうした非常時にもかかわらず、ノーベル、ノーベル賞に関する図書は出版され続けたのである。そこには、ノーベル、ノーベル賞紹介について、3点の動きから成熟と変化が見出せる。

第1に、ノーベルのみを扱った伝記が1909年以来、久々に続けて3冊も出版されている。すなわち、1941年の西澤勇志智(1882～1943年)『ノーベル兄弟』<sup>56)</sup>、1942年の槇尾榮(1895～1980年)『ノーベル傳』<sup>57)</sup>とR・ゾールマン[ソールマン](1870～1948年)、H・シュツク(1855～1947年)『大ノーベル傳』<sup>58)</sup>である。断片的な情報の寄せ集めではなく、本格的にノーベルの生涯と業績を紹介しようとする意図が感じられる。ノーベル、ノーベル賞についてもっと詳しく知りたいという一般の関心を反映したものであろう。

第2に、ノーベル文学賞に基づいた文学全集、全18巻が1940年から1942年まで出版され、ノーベル賞への関心の深まりがみられた。個別の翻訳ではなく、ノーベル文学賞受賞者の作品を網羅して紹介し、世界文学を理解する一助にしようとしていた。以上の2点はまさにノーベル、ノーベル賞紹介が日本で成熟してきたことを示している。

第3に、変化もみられる。それは、1943年、1944年になると、戦時体制が強化される中で、ノーベルの紹介で爆薬開発への関心が強まっている。戦争の激化とともに、政府による検閲も強まり、物資不足も深刻になった結果、ノーベル賞を創設したという業績よりも、軍事的にも多大な貢献をした爆薬を開発したというノーベルの科学技術開発力に注目が集まったのである。その開発者としての悪戦苦闘を知り、爆薬について基礎知識を得ることは、成人にとっても、児童にとっても有益と判断されたと考えられる。

では、以上の3点を裏づける文献の内容を具体的に検討しよう。

#### ①西澤勇志智『ノーベル兄弟』、槇尾榮『ノーベル傳』、R・ゾールマン、H・シュツク『大ノーベル傳』の内容

1940年代にはノーベルについて本格的な伝記が3冊続けて出版されている。1941年の西澤勇志智『ノーベル兄弟』、1942年の槇尾榮『ノーベル傳』とR・ゾールマン、H・シュツク『大ノーベル傳』の3冊である。各伝記の奥付の発行日をみると、わずか7ヵ月あまりの間に出了ことになる。執筆、編集、発行に要する時間を考えると、ほぼ同時期に別々に準備が進められていたと考えられる。この3冊は、内容的に極めて重なるものである。極めて似ているといっても過言ではない。それは、分量からみても、『ノーベル兄弟』が314頁、『ノーベル傳』が307頁、『大ノー



ベル傳』が457頁であり（判型は3冊とも同一のB6判）、ノーベルについて同程度に詳しく論じることができるものであった。以下では、3冊を比較しつつまとめて紹介する。

3冊の内容が極めて似た理由は、明白である。『ノーベル兄弟』と『ノーベル傳』は『大ノーベル傳』の原本に主に依拠して書かれたと判断される。『ノーベル兄弟』には参考文献は全く明記されていないが、たとえば『大ノーベル傳』ドイツ語版原本に掲載されているノーベルの父、兄弟らの写真、サンレモの実験所の写真、石油事業関係の写真を再利用していると考えられ、同書の付録として収録されているノーベルの調書、特許一覧も取捨選択して巻末に掲載している。無論、『ノーベル兄弟』には冒頭に火薬の歴史についての章を設けるなど、独自の工夫もなされている。ただし、ノーベルの評伝部分については『大ノーベル傳』に負うところが大きい。

他方、『ノーベル傳』には参考文献リストがあり、その中には『大ノーベル傳』の英語版（米国）原本が明記されている。これ以外には、1909年の藤井宇平『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』が利用していたヘンリー・デ・モーゼンタールの論文、ノーベル財団の年次報告書『ノーベル賞』と規約、日本学術振興会が邦訳した上記ノーベル財団規程集などが列挙されている。また、『ノーベル傳』は『大ノーベル傳』英語版（米国）原本に掲載された写真8葉すべてをそのまま巻頭に収録している。

以上、『ノーベル兄弟』と『ノーベル傳』が『大ノーベル傳』の原本に大きく依存していることを指摘したが、それは無理のないことであった。1940年代前半の時点でノーベルについて定評のある基本文献は世界を見渡しても『大ノーベル傳』の原本しかなかったからである。『大ノーベル傳』の原本は、1926年にスウェーデンにおいて出版されている。これは、ノーベルの遺言を執行し、当時はノーベル財団理事であったラグナル・ソールマンと当時ノーベル財団理事長を務めていたヘンリック・シュックのノーベル財団関係者が書いたものであり、ノーベル財団認定の文献に指定され、今日でもノーベルとノーベル賞に関して基本文献に位置づけられているものである。そのため、同書は他の言語にもすぐに訳されている。1928年にドイツ語版が出ており、1929年にはドイツ語版からの重訳で英語版（英国、米国）が出ている<sup>59)</sup>。1942年に邦訳された『大ノーベル傳』は、訳者によれば、ドイツ語版を基に英語版も参照して翻訳されたものである<sup>60)</sup>。

3冊の邦語のノーベル伝について、著者、訳者の紹介とその出版意図をまとめておこう。まず西澤勇志智『ノーベル兄弟』であるが、著者の西澤は東京帝国大学工学部において化学の教授を務めていた。化学分野の多数の著書の中には、たとえば『新兵器化学 毒ガスと煙』や『新兵器化学 花火の研究』などの軍事、火薬の研究もあり<sup>61)</sup>、ノーベルの研究と重なる面を有していた。『ノーベル兄弟』の執筆について、西澤は序において「科学の林は奥深い。ここに歩むものは、多く迷路に迷い入つて、人間崇高の美しさを忘れがちである。／科学に踏み入つて、科学に墮さなかつたものに、私はノーベルを見出す。／……ノーベルは私にとつて、正に巖頭の美しき松である。／彼の伝記を描かうとするには、雄渾な名匠の筆を待たなければならない。——私が敢へて拙き筆をとつて彼を描いたのは、勁古にして美なる彼の生涯を好み且つ慕ふからである」と述



べている<sup>62)</sup>。西澤は短い序しか書いていないが、純粋に科学者としてのノーベルの生き方を高く評価し、彼を慕っていたことが伝わってくる。

では、槇尾榮の『ノーベル傳』はどうであろうか。槇尾は早稲田大学卒業後、通信省で技官として働き、電気工学関係の著書を出すとともに、小説なども書いていた人物であった。『ノーベル傳』を出した出版社、富山房からは『エジソン伝』、『ワット伝』も出版している<sup>63)</sup>。槇尾は、序において「アルフレッド・ノーベルの名は『ノーベル賞』の名と爆薬『ダイナマイト』の名とで世間に知れわたつてゐる。／人類の文化進展の上に偉大な役割を演じて来てゐるノーベル賞は彼の遺産を其の基金とし、彼が生涯を通じて念願してゐた理想を是によつて具現せしめようとしたもので、今日地上文化の強い推進力となつてゐる。／又ノーベルを世界的発明家たらしめた爆薬ダイナマイトは、彼が一八六七年に発明したもので、爾後七十有五年間、鉄道建設に、運河開鑿に、道路建設、土地耕作、鉱物資源開発に驚くべき貢献をなしつゝ来てゐる。／彼のダイナマイト無くしては右諸事業の発達、ひいては世界文化の進展は、到底今日あるが如きを期し得なかつたのである」とまず述べ、ノーベル賞とダイナマイトが人類文化の発展、世界文化の進展に貢献していることを強調している。この点について「洵にノーベルは絶大な業績を世に残した人で、人は彼を目して偉大な発明家であると謂ひ、亦人類文化の恩人であるとも讃へてゐるのである」とも述べている。それを受けて、槇尾は「此處に偉人アルフレッド・ノーベルの伝記を上梓して彼が発明家として歩んで来たはてしない足跡を、彼が一人間として生きて来た生活を、はては彼をめぐる時代の変遷を回顧するしだいである」と執筆の動機を語っている<sup>64)</sup>。ノーベル賞とダイナマイト、双方の重要性を認識したうえで、ノーベルを捉えようとしていた。

なお、この序において、ダイナマイトを説明した箇所には以下の文言も続いている。すなわち、「更に思ひを大東亜戦争に致してみても、皇軍ビルマ攻略に際して、このダイナマイトは嶮山を貫く兵站自動車路の建設に、其他の軍路開設に甚だしくつくす所が多く、皇軍赫々の勝利の一因を成したものである。／又一八七〇年独仏戦争に於ける独軍の大捷も、発明されて間のないダイナマイトを独軍が使用した点にあつたと謂はれてゐる」との指摘があり<sup>65)</sup>、日本、ドイツの戦争においてダイナマイトが果たした役割が強調されているのである。序の全体のトーンからは、やや浮いている文言である。同書が出版された1942年時の戦時体制を意識して、追加されたものかもしれない。なお、同箇所は、1949年に出版された同書の再版では削除されている<sup>66)</sup>。

最後にR・ゾールマン、H・シュツク『大ノーベル傳』の訳者、その出版意図について考えてみよう。訳者の菊池武一は、国学院大学教授も務めた英文学者であった。1930年代にはコナン・ドイルのシャーロックホームズ・シリーズの翻訳を岩波文庫から出すなど<sup>67)</sup>、多数の英米文学を翻訳している。菊池は、序においてノーベルの重要性を述べている。すなわち、「偉大なる科学者は偉大な夢を持つてゐる。／ノーベル賞のノーベルは偉大な科学者であつた。しかし彼はただの科学者ではなかつた。偉大な科学者であると共に偉大な事業家でもあつた。しかし更に、もつと大きな夢想家であつた。この彼の夢が彼を偉れた発明家たらしめた。又爆発薬の発明家に世界

の永久平和を夢みさせたり、晩年死の直前まで劇詩を書かせたりしたものは、みなこの大きな夢であつた」と述べ<sup>68)</sup>、ノーベルを「偉大な科学者」、「偉大な事業家」、「もっと大きな夢想家」と捉えているのである。その上で、菊池は、「今日我々の身邊にあるもので案外にこの親子の発明にかゝるものがあるのには驚かされる。恰度我々の眼前の文明の中にアラビアの数理的発明が何食はぬ顔をして存在してゐるやうに、我々は知らず識らずの内に瑞典の大発明家のお蔭を蒙つてゐるのを知つて驚くのである」とも述べ<sup>69)</sup>、ノーベルの発明が身近な存在であることも指摘するのである。さらにもう1点だけ菊池のノーベル観が出ている文章を引用すると、「石油といひ火柴といひ、ノーベルの如く現在の文明の核心に触れるものに深い関係を持つた人はさう多くあるまいと思ふ。しかも文学にも関心を持ち、ノーベル賞の設定によつて如何に大きな影響を近代文化に及ぼしたかを思ふとき、今更ながらその足跡の大きさに驚嘆せずにはゐられない。彼も亦近代偉人の一人であつたといつてよからう」と指摘し<sup>70)</sup>、近代文化への影響の大きさからノーベルを「近代偉人の一人」としているのである。

以上、1941年、1942年に出た3冊のノーベル伝について、著者、訳者のノーベル観からその出版意図を考えてきた。そこに共通するのは、ノーベルを偉大な科学者、事業家、発明家であり、人類文化の恩人といった極めて肯定的でバランスのとれた評価をしていたことであつた。それを日本人に伝える手段としてノーベル伝が執筆、翻訳されたのであつた。1930年代までに多数のノーベル関係の図書があつたが、それらを土台とし、それらの集大成としてノーベルについて本格的な伝記が出たのである。また、一度に3冊も出たところに、ノーベルの人氣がうかがわれる。戦時体制下の日本において、ノーベルの生き方がより新鮮に映つたのかもしれない。

## ②ノーベル賞文学叢書の内容

1940年から1942年の約2年半あまりの間、全18巻にも及ぶ「ノーベル賞文学叢書」が出版されている<sup>71)</sup>。その全容は表2の通りである。これは、日本でほとんど知られていない作家を含めてノーベル文学賞受賞作家の作品を邦訳したものであつた。すべての受賞者が取り上げられている訳ではない。詩人(1901年のシュリ・プリュドム、1904年のフレデリック・ミストラル[1830～1914年])、歴史家(1902年のテオドール・モムゼン[1817～1903年])、哲学者(1908年のルドルフ・オイケン[1846～1926年]、1927年のアンリ・ベルクソン[1859～1941年])などの受賞者は除き、作家が主な対象となっている。

同叢書は、第1回配本時から全18巻を予定していた。それは、第1回配本時の新聞広告に明記してある。叢書全体の宣伝文句として、同広告は、「現世紀文学の粋を集めた真の世界文学！読書界に贈る文化の珠玉篇！／世界唯一至高の文学賞たるノーベル文学賞受賞作家の代表的傑作を網羅せる本叢書こそは、現世紀文学の最高水準を示すもので、これこそ真の意味での世界文学である！我国全読書人の知性と教養のための燦然たる芸術の殿堂！」と記している<sup>72)</sup>。この叢書は、ノーベル文学賞を「世界唯一至高の文学賞」であることを前提にして、その受賞者の代表傑

表2 「ノーベル賞文学叢書」一覧

著者	書名（シリーズ名）	訳者	出版社	発行年月日	著者文学賞受賞年	備考（出身国、その他）
フランス・エミール・シツランピア、ジグリッド・ウンセツト	しとやかなる天性、ふたりの母、瀬戸人形（ノーベル賞文学叢書1）	鶴田知也、宮原晃一郎	今日の問題社	1940年5月18日	1939年、1928年	フィンランド、ノルウェー。巻末にノーベル文学賞受賞作家一覧表あり
シンクレア・ルイス	妖聖ガントリー（ノーベル賞文学叢書2）	前田河廣一郎	今日の問題社	1940年6月18日	1930年	アメリカ
ロジェ・マルタン・デュ・ガール	ジャン・バロアの生涯（ノーベル賞文学叢書3）	青柳瑞穂	今日の問題社	1940年8月15日	1937年	フランス
グラツィア・デレッタ	砂漠の中（ノーベル賞文学叢書4）	岩崎純孝	今日の問題社	1940年9月28日	1926年	イタリア
バアル・バツク	ありのまゝの貴女（ノーベル賞文学叢書5）	新居格	今日の問題社	1940年11月5日	1938年	アメリカ
ビヨルンステルネ、ビヨルンソン、ヘンリック・ポントピダン、ヴエルネル・フォン・ヘイデンスタム	日向丘の少女、アルネ、漁師の網、薄幸詩人の死、何年ぶりの微笑（ノーベル賞文学叢書6）	宮原晃一郎、西田正一	今日の問題社	1940年12月22日	1903年、1917年、1916年	ノルウェー、デンマーク、スウェーデン
パウル・ハイゼ	カプリ島の結婚（ノーベル賞文学叢書7）	舟木重信、中谷博	今日の問題社	1941年1月22日	1910年	ドイツ。「ヴェニス秘話」、「人間の限界」、「息子の失踪」もあり
ロマン・ロオラン、カール・シュピッテレル	姉と妹、少女嫌ひ（ノーベル賞文学叢書8）	高橋廣江、吹田順助	今日の問題社	1941年2月25日	1915年、1919年	フランス、スイス
アナトル・フランス、ユーゲン・オニール	火の娘、溶接されたもの（ノーベル賞文学叢書9）	吉川静雄、三好十郎	今日の問題社	1941年4月15日	1921年、1936年	フランス、アメリカ
ヘンリック・シエンキウィツ、モウリス・メーテルリンク	青春の日、二人の女（ノーベル賞文学叢書10）	加能作次郎、太田咲太郎	今日の問題社	1941年5月20日	1905年、1911年	ポーランド、ベルギー
ラディスラウ・レイモント、バーナード・ショウ	祖国に告ぐ、悲しみの家（ノーベル賞文学叢書11）	三宅史平、飯島小平	今日の問題社	1941年7月2日	1924年、1925年	ポーランド、アイルランド
クヌート・ハムスン	白夜の牧歌（ノーベル賞文学叢書12）	宮原晃一郎	今日の問題社	1941年7月28日	1920年	ノルウェー
ラドヤード・キプリング、ホセ・エチェガラ	印度物語、狂か聖か（ノーベル賞文学叢書13）	渡鶴一、佐久間原、高橋正武	今日の問題社	1941年11月15日	1907年、1904年	イギリス、スペイン
トーマス・マン、ハシント・ペナベンテ	主人と犬、海上を飛んだ胡蝶（ノーベル賞文学叢書14）	江間道助、笠井鎮夫	今日の問題社	1941年12月15日	1929年、1922年	ドイツ、スペイン
ルイーズ・ピランデルロ	或る映画技師の手記（ノーベル賞文学叢書15）	岩崎純孝	今日の問題社	1942年1月1日	1934年	イタリア
ゲルハルト・ハウプトマン	女人島の奇蹟（ノーベル賞文学叢書16）	逸見廣	今日の問題社	1942年3月5日	1912年	ドイツ
イワン・ブーニン	村（ノーベル賞文学叢書17）	中村白葉	今日の問題社	1942年6月25日	1933年	無国籍（ロシアからフランスへ亡命）
セルマ・ラゲルレフ	エルサレム（ノーベル賞文学叢書18）	前田晃	今日の問題社	1942年10月10日	1909年	スウェーデン

出所 国会図書館蔵書データベース上にある文献から筆者作成。

作を網羅し、「現世紀文学の最高水準を示すもの」で、「真の意味での世界文学」と位置づけたものであった。これは、この当時にはすでに日本の文学界においてノーベル文学賞が高く評価されていたことを物語っている。

第1回配本となったノーベル賞文学叢書第1巻は、フィンランドのフランス・エミール・シツランピア（1888～1964年）、ノルウェーのジグリッド・ウンセツト（1882～1949年）の作品が選ばれている。シツランピアは1939年の受賞者であり、当時最新の受賞者であった。日本でよく知られていないが、注目されていた作家にまず焦点を当てたのであろう。記者の鶴田知也（1902～1988年）は同書序の冒頭において、「一九三九年度のノーベル賞は、北欧芬蘭の作家フランス・エミール・シツランピアに贈られた。芬蘭は長距離選手やスキー等により又、今次戦乱に於いて寡兵よくソ連の精鋭を悩まし通したことで我々には親しいが、この受賞の機会がなければ、我々は遂に彼の存在を知らずに終つたことであらう。そこには色々の問題の暗示があるが、

それはそれとして、我々は、この優れた作家に注目する契機を作つて呉れた権威的なノーベル賞制度の存在に感謝せずにはゐられないのである」と書いている。序の終わりは「……日本に於ける最初の纏つた訳書であることは、私かに誇りとする所である」と結ばれている<sup>73)</sup>。有名作家や大国の作家だけでなく、世界の様々な作家をノーベル文学賞受賞者という観点から紹介しようという文学的意気込みが感じられる。

この企画は、第1回配本時から、厳しい環境で出版されたことがわかる。すなわち、先に引用した第1回配本時の新聞広告には、「用紙に制限あり、増刷困難ですからなるべく予約の申込を歓迎します」とあり<sup>74)</sup>、紙の統制下での開始となつたのである。しかし、太平洋戦争が始まった後も配本が中断することはなかった。1941年7月以降は、配本のペースが落ちているが、1942年10月の第18巻の出版、完結まで続いたのである。敵国のアメリカ、イギリスの作家は、1941年12月の太平洋戦争開戦前にすでに出版されており、その後はドイツ、スペイン、イタリア、スウェーデンなどの同盟国側の国、中立国の作家であつた。

なお、ノーベル文学賞に依拠した文学全集の企画は、この1940年開始の「ノーベル賞文学叢書」が初めてではない。1927年に、「ノーベル賞文庫」全30巻が万有文庫刊行会によって企画されていた。1927年6月に第1回配本を予定しており、全30巻の詳細な予定が新聞広告に出ており、予約を募っていた。その宣伝文句によれば、「本文庫は我二十世紀第一年より今日に至るまでの出版物数百万中より各一年一人一作に限つて『ノーベル賞』を授与せられた世界最大傑作の集大成である。即ち現代文化粹中の粹であつて、二十世紀を代表する最大名著最大芸術作品の総量である。復刻再版の廉売本とは自ら選を異してゐる」とされる<sup>75)</sup>。別の日の広告も「ノーベル賞を受けたる作品と言へば、世界万国に亘つて、満一年間に発表せられたる幾十万の著作中、最も傑出したる大作、最も意義深い創造を意味する。即ちわが『ノーベル賞文庫』は、二十世紀の第一年より今日までの、無数文献中より、一粒選りに選ばれたる最大傑作最高名著の総量に他なるぬ」と、同文庫の意義を強調していた<sup>76)</sup>。これらの宣伝にみられるように、この企画の前提として、受賞者を選出したノーベル賞に対して絶対的な信頼が見出せるのである。

しかし、この企画が実現した形跡はない。毎月配本で、会費が1ヵ月2円50銭とされており、予約が集まらなかった可能性が高い。当時、予約出版は警視庁への届け出が必要とされており、官報に「ノーベル賞文庫」の予約出版の届け出、廃絶が繰り返されことが記されている<sup>77)</sup>。それによれば、最終的に1927年4月6日に届け出がなされた「ノーベル賞文庫」の予約出版は1928年9月4日に廃絶されたのであつた<sup>78)</sup>。このように、「ノーベル賞文庫」は企画倒れに終わったが、1920年代後半の段階ですでにノーベル文学賞に基づいた文学全集の詳細な企画があつたことは、記憶にとどめておいてもよいであろう。

### ③江口芳樹『文明を築いた人々』、横山夏樹『輝く靖國物語』の内容

#### ③-1 江口芳樹『文明を築いた人々』の内容

1940年代のノーベル紹介で特徴的な点は、ノーベルの爆薬開発者としての貢献が高く評価されたことである。その1例を1942年出版の江口芳樹（生没年不明）の『文明を築いた人々』<sup>79)</sup>に見出すことができる。

同書は、交通機関、機械、写真術、電気、応用化学、医学の発達各区分で日本、外国の多数の科学者を紹介したものである。ノーベルのほかにも、ジェームズ・ワットらのイギリス人、ヘンリー・フォード、ライト兄弟らのアメリカ人など多数の外国人が含まれている。同書のはしがきには、戦争中に同書を企画した背景が詳しく書かれているため、少し長いが引用しておこう。

まず、同書は「日本はいま、大東亜戦争を戦つてゐます。これは永い間、東洋の天地をわがもの顔に横行してアジアの富を奪つてきたアメリカやイギリスをうち倒し、虐げられてきたアジアの民を救はうとする聖戦であります。私たちはどんな困難な思ひをしても、この戦争は必ず勝たなければなりません。／しかも、この戦争はかなりに永くかかるかも知れません。十年、二十年、いや、もつと永くて百年もかかるかも知れません。世界はいま、動乱期に入つたのです。だが、この動乱は間違つた世界を叩き直して、新しく正義の世界を、そして永遠に平和な世界を築き上げるためにはどうしても必要なのです。私たちは腹帯をしつかりと結んで、どつしりと落ちついて、この動乱に対処しなければなりません」と現状認識を示し、10年、20年、100年かかってでも現在の戦争に必ず勝たねばならないと訴えている。その上で、対処する方法として、2点を挙げている。第1に「めいめいが自分の持場にあつて、仕事に全力を尽すことです。そしてその仕事をこれまでよりも、たとひ僅かでも立派にしあげようと努力することです」と述べ、第2に「私たちが祖先から受けついできた世界無比のすぐれた日本精神の上にどこの国にも負けない立派な科学文明を築きあげて、大いに国力を発展させることです」とある。優れた発明や発見を続々と成し遂げようと、同書は「今日の科学文明を築くのに非常に貢献した人々の業績を述べたもの」とされ、基本的に少年少女に読んでもらうことを想定していた<sup>80)</sup>。その点で、同書は戦争の勝利をめざし科学文明を築き上げ、国力を発展させるために編纂された科学者の紹介書であり、その中にノーベルも含まれていた。

同書のノーベル紹介は、他の文献と大きく異なる点がある。それは、該当章の見出し、「火薬界の巨人ノーベルと下瀬雅允」からもわかる。すなわち、ノーベルを単独で紹介せず、日本人の火薬開発者、下瀬雅允（1859～1911年）も同時に取り上げていたのである。同章は、ノーベルについては、ニトログリセリンによる爆薬開発で多くの事故が起こっていたが、ノーベルは珪藻土を使い、ダイナマイトを開発したこと、さらにコロジオンとニトログリセリンを混ぜて無煙火薬を開発したこと、莫大な富と名誉を得たが、ダイナマイトと無煙火薬が戦争に用いられて多くの人命を奪うようになり、これに心を痛めて遺言でノーベル賞を設けたことが触れられている<sup>81)</sup>。

ノーベルの紹介の後、「破邪顕正の強力な火薬を発明した功労者」として日本人の下瀬の紹介



に移るが、その際、著者は火薬について独自の論理を展開している。「たしかに火薬は文明を建設するとともに、用ひ方によつてはかへつて文明を破壊することにもなる。だが戦争は、いつも文明を破壊するものとはいへない。ヨーロッパの場合には戦争は武力と武力の争ひであることとて、ノーベルの心痛も無理ではない。だが、戦争でも世界唯一の君子国日本の場合には、戦争は不正の文明を斥けて新しく正義の文明を築かうとする皇道の戦争であるから、これまた文明を建設するものである。それ故に、この場合に用ひられた火薬は新しい正義の文明建設の殊勲者といはなければならない」と述べ<sup>82)</sup>、ヨーロッパとは異なり、日本の戦争が正義の文明を築こうとするものであり、そのための火薬も「新しい正義の文明建設の殊勲者」と正当化しているのである。同書は、下瀬が1899年に開発した「下瀬火薬」により、日本が日露戦争に勝利したことに触れた後、「……この日露戦争は、悪逆な西洋諸国からアジアの民を解放する聖戦のいとぐちとなつたことを思ふと、下瀬火薬の発明者下瀬雅允博士の功績は、非常に大きいものといはなければならない」と結んでいる<sup>83)</sup>。

以上のように、同書はノーベルの紹介を行ない高く評価するとともに、同等の扱いで日本人の下瀬についても取り上げたのである。その際、火薬が戦争遂行上、極めて重要な意味をもつことを認識した上で、科学技術の1分野としてその開発の重要性を訴えている。まさに日中戦争、太平洋戦争を行なっていた日本人の問題意識が色濃く反映されたノーベル紹介であった。

### ③-2 横山夏樹『輝く靖國物語』の内容

1940年代のノーベルの紹介で、時代を色濃く反映した文献として、1944年に出た横山夏樹(1886～1973年)の『輝く靖國物語』もある<sup>84)</sup>。横山は、小学校教諭、陸軍軍属、報知新聞社、幼年雑誌の主幹を務めた後、東京童話劇協会、人形劇団童話劇場で公演活動を行ない、童話創作、童話講演をしていた人物であった。著者は、同書の序において、「……清浄にして尊厳な、而も温い母の抱擁にも似た靖国神社の雰囲気世の多くの少国民諸君に伝え、靖国精神の昂揚を意図すると共に、戦争と科学のつながりを鮮明し、科学の重要性を強調し、時代と共に展開飛躍する大いなる輝く日本歴史の真髄に触れてみたいとつとめたつもりである」と執筆動機を記し<sup>85)</sup>、靖国神社の紹介、それにまつわる話を展開している。

その中の1章に「爆発火薬と大科学者—ノーベル平和賞金—」がある<sup>86)</sup>。日本人軍人の話を中心とする同書の中で、外国人が中心人物として登場する点で、異色の章である。まず同章の冒頭でノーベルを取り上げる意図を説明している。すなわち、「現代兵器のうちでは、飛行機は、なくてはならぬ大きな働きをしてゐますが、もし、この爆弾がなかつたら、戦争の及ぼす破壊威力の上に、大きな違ひがあつたでせう。プリンス・オブ・ウエールズのやうな不沈艦を、海底旅行させたのも、ハワイ攻撃の緒戦に、澤山の敵艦をぶくぶく〔原文は繰り返し符号〕とやつたのも、日本精神の権華ともいふべき勇士が、この爆発火薬を、有効に使つたからです」と説明し、現代戦における爆発火薬の重要性を指摘している。それを受けて、「では、この爆発火薬は、どうし



て出来たか、誰が発明したか、これは是非とも知っておかなくてはなりません」と問題提起をし、その答えとして「アルフレッド・ノーベルといふ人こそ、この恐るべき性能のある爆発火薬を発明した大発明家なのです」としている<sup>87)</sup>。

その後、ダイナマイト開発という観点からノーベルの生涯を整理している。実験中に弟を亡くしたが、ますます研究に熱中したこと、父とは異なり、アルフレッドの研究はしっかりした科学に基礎をおき、確信と光明をもって研究を続けたこと、親孝行であったこと、ニトログリセリンによる事故が多発したが、ダイナマイトを開発し、世界中から需要が激増したことなどをまとめている。この爆薬について、同書はトンネル、鉱山、油田、運河、地下鉄道などでの利用を挙げた上で、「……人類を幸福にするための事業に、爆発薬は用ゐられて、大きな役割を務めてゐる一方、爆薬は戦争に、重要兵器として取りあげられたばかりでなく、秘かに画策される悪虐行為にも往々使用されるやうになりました」と述べ、要人の暗殺などにも使われていることに触れている<sup>88)</sup>。

これに続けて、同書はノーベル賞設立にも触れ、「ノーベルは当時既に、それを察して、自分の発明が、社会文化のために、有益に使はれる一方、好ましからざる破壊手段にも用ゐられることを心配の余り、その遺言によつて、ノーベルの莫大な遺産をもつて、ノーベル平和賞といふものを設けることになつたのです」と述べている<sup>89)</sup>。なお、同書ではこの「ノーベル平和賞」の本身として物理、化学、医学、文学の4つの学問への賞との説明がなされ、「平和賞」が抜け落ちている。

最後に、同書はノーベルの評価として「その発明によつて、社会進化の為に功献し、発明によつて得た莫大な金をもつて、ノーベル平和賞を設けて、その死後までも、永久に社会の進化と世界平和の為に尽してゐるといふことは、実に偉い人物だと申さなくてはなりません」と述べている<sup>90)</sup>。

以上のように、著者は戦況の厳しくなった1944年にあっても、また靖国神社の紹介であっても、外国人のノーベルを堂々と紹介していたのである。これを可能にしたのは、著者が「ノーベルの苦心になる爆発火薬が、爆弾の母体である」<sup>91)</sup>との認識に立ち、爆薬開発の観点から科学者としてのノーベルの貢献を高く評価していたからである。戦争において軍事技術の発展は死活的な重要性をもつのであり、ノーベルの軍事技術開発者としての面を強調した結果であろう。また、第二次世界大戦中、スウェーデンは中立国として直接戦争に関与せず、連合国と距離をおく立場にあり、ノーベルが「敵国人」でなかったことも有利に働いたと考えられる。

軍事技術としての爆薬とノーベルへの関心は、1943年に出版された高木六郎『使用解説火薬』にも同様にみられる。これは火薬の専門書である。著者の高木（?～1979年）は、化学工業の民間会社の研究所員であり、火薬の専門家であった。そのうちの1章は、「ダイナマイトとノーベル」とされ、ノーベルの研究、各種ダイナマイトを詳細に説明している<sup>92)</sup>。その説明の中で、日本とダイナマイトとの関係についても簡単に触れている。すなわち、ダイナマイトは1881年に横浜の

モリソン商会の手で日本に初めて紹介され、その後、イギリス、ドイツのノーベル社の製品が輸入されたこと、1905年に日本政府は民間用ダイナマイトの製造を東京砲兵工廠岩鼻火薬製造所で行なう計画を進め、国産ダイナマイトを製造したこと、1916年には初の民間火薬会社、日本火薬製造株式会社が設立され、2種のダイナマイトを製造したことなどが説明されている<sup>93)</sup>。

## おわりに

以上、本稿は、第二次世界大戦以前にノーベル、ノーベル賞に対する日本人の関心がいつ頃、いかなる経緯で形成され、いかなる特徴をもっていたかを考察するため、第二次世界大戦以前のノーベル、ノーベル賞に関する新聞記事、雑誌記事、図書を分析した。

日本の新聞は、ノーベルの死の直後からノーベルの遺言に関心をもち、1902年頃からノーベル賞の受賞者についても報道するようになった。雑誌でも1900年代から実際に創設されたノーベル賞についての紹介がなされた。まだ数は多くなかったが、着実に紹介は続いたのである。その結果、1910年頃までにノーベルとノーベル賞について存在は日本で十分認知されていたと考えられる。

その後、新聞報道は、1910年代から1930年代までノーベル賞受賞者の選出を同時代的に伝える記事を中心に順調に増えた。その中心は文学賞、平和賞関連の記事であった。1930年代には自然科学3賞に関する記事も増加しているが、文学賞、平和賞関連の記事には数に及ばない。しかし、こうした増加は、第二次世界大戦の勃発で中断している。1940年以降はノーベル賞に関する新聞報道は限定的なものであった。

他方、図書に関しては、第二次世界大戦以前に約40冊の図書がノーベル、ノーベル賞に関して出版されている。本稿は、1900年代、1910年代～1930年代、1940年代の3つの時期に区分して、主な図書を紹介した。第1期の1900年代はノーベル、ノーベル賞に関して紹介が始まった時期であり、日本初のノーベルの伝記、藤井宇平『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』が1909年に出ている。ノーベルの伝記が1901年のノーベル賞創設から早い段階で出版されたことは、日本人のノーベル、ノーベル賞理解を進める上で大きな意味をもったと考えられる。第2期の1910年代～1930年代には、ノーベル、ノーベル賞に言及する文献が徐々に拡大し、紹介内容も深くなった時期である。成人用のものだけでなく、児童用の紹介も活発になった。これらの文献は、ノーベルを「偉人」の典型的事例として捉え、具体的に「世界的実業家」、「富豪」、「大成功者」、「爆薬王」、「大科学者」、「大発明家」など様々な切り口から紹介した。これらの紹介を通じて、ノーベルとノーベル賞の存在は日本人の間に広く定着したと考えられる。特に1930年代はノーベル、ノーベル賞に関して多数の図書が出版されており、この時点でノーベル、ノーベル賞についての知名度は日本で極めて高かったと推測される。第3期の1940年代は、ノーベルについて本格的な伝記が3冊出版され、さらに「ノーベル賞文学叢書」全18巻も予定通り完結

している。そのため、紹介が成熟した時期であった。しかし、同時に戦時体制下で紹介の内容に変化が生じた時期でもあった。ノーベル賞よりも、ノーベルが爆薬開発で大きな貢献をしたことが強調され、爆薬の重要性、科学技術開発の重要性が指摘されている。

以上、本稿の内容を振り返ったが、ノーベルの死後、ノーベルとその遺言に基づいて創設されたノーベル賞に関する紹介は時代とともに充実してきたことがわかる。その結果、第二次世界大戦以前の段階で、ノーベル、ノーベル賞についての知名度は日本で極めて高かったのである。また、ノーベル、ノーベル賞に対する日本人の評価は極めて好意的なものであった。ノーベルを「世界的実業家」、「富豪」、「大成功者」、「爆薬王」、「大科学者」、「大発明家」といった呼び名でみていたが、否定的なニュアンスはない。発明、発見という観点で、ノーベルの爆薬開発力は絶賛されている。日本で科学技術の重要性は広く認識されており、ノーベルはまさに発明家、発見家の典型的モデルにみられたのである。また、死後、創設されたノーベル賞により、世界の学問、平和に対する貢献も高く評価されている。児童用の紹介に典型的であるが、日本人の受賞者が出ることを願う文献も多かった。

時代あるいは著者により、ノーベル、ノーベル賞に関する紹介で重点の置きどころは異なる。時代に合わせて著者が重視する観点が強調されたため、紹介の中身に多少の違いはみられるものの、第二次世界大戦以前の時期においてノーベル、ノーベル賞は極めて肯定的に評価され続けたのである。第二次世界大戦の敗北の後もこうした見方は日本人の間で生き続け、1949年の湯川のノーベル賞受賞でさらに強まることになったのである。その意味で、湯川の受賞後にみられるノーベル賞に対する日本人の熱狂は第二次世界大戦以前に起源があるのであり、第二次世界大戦以前から連続した動きとして捉える必要があろう。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

#### 註

- 1) 拙著『日本人は北欧から何を学んだか—日本・北欧政治関係史入門』(新評論、2003年)、88～89頁。
- 2) 横尾榮『ノーベル傳 (再版)』(富山房、1949年)、再版の辞1頁。引用にあたり基本的に漢字の旧字体を新字体に変更した(以下、同様)。同書は1942年の初版のデータを更新するとともに、湯川に関する紹介を巻末に追加したものである。初版については、後述する。
- 3) 「米露石油の競争」『東京朝日新聞』1895年9月27日朝刊、1頁。「石油競争の真相」同、1895年10月3日朝刊、5頁。「石油騰貴に就て」同、1895年11月21日朝刊、2頁。「輸入石油事業」同、1896年7月16日朝刊、2頁。
- 4) 「バクー石油発見人死す」『東京朝日新聞』1896年9月26日朝刊、2頁。同記事には「アリフレッド及びリユドウキグの二兄弟」にも言及がある。
- 5) 「北極探検船の出発」『東京朝日新聞』1896年8月1日朝刊、1頁。
- 6) アンドレに対するノーベルの支援は、ノーベルの主要な伝記にも登場する。アンドレの気球北極探検は、遭難死という形で終わっている。たとえば、エリック・バルイェングレン『ノーベル伝』松谷健二訳(白水社、1968年)、153～154頁。ケンネ・ファント『アルフレッド・ノーベル伝——ゾフィーへの218通の手紙から』服部まこと訳(新評論、1996年)、506～509頁。
- 7) 「戦時禁制品不着訴訟」『東京朝日新聞』1896年8月28日朝刊、3頁。
- 8) 当時、日本国内でダイナマイトは製造されておらず、ヨーロッパから輸入されていた。日本で最初にダイナマイトが製造されたのは、1905年、群馬県高崎市にあった東京砲兵工廠岩鼻火薬製造所でのことであった。同製造所については、小池重喜「陸軍岩鼻火薬製造所の設立と展開」『高崎経済大学附属産業研究所紀要』第24巻第1号、1988年10月が詳しい。
- 9) 「学術奨励」『東京朝日新聞』1897年1月12日、第2回1頁。
- 10) 「<雑報>アルフレッド、ノーベル氏ノ遺産(学術及平和ノ奨励)」『国家学会雑誌』第11巻第122号、1897年4月15日、404～405頁。

- 11) 岡田良一郎「＜論説＞アルフレッド、ノーベル氏ノ遺産処分法ニ就テ」『国家学会雑誌』第11巻第124号、1897年6月15日、573～581頁。なお、同論文は以下に再録されている。同「アルフレッド、ノーベル氏の遺産処分法に就テ」『奉公（奉公会）』第34号、1905年11月11日、20～27頁。
- 12) 「＜よみうり抄＞懸賞授与者」『読売新聞』1902年2月27日朝刊、1頁。
- 13) 「諸大学教授受賞」『読売新聞』1905年12月13日朝刊、2頁。「米大統領の平和賞章」同、1907年1月17日朝刊、1頁。その他、同紙は1907年のノーベル平和賞推薦の募集を掲載している。ノーベル平和賞は、「ノーベル平和賞品」と表記されている。「ノーベル平和賞品」同、1906年11月28日朝刊、2頁。
- 14) 「独逸の学問奨励」『東京朝日新聞』1905年12月13日朝刊、2頁。「大統領と平和」同、1906年12月12日朝刊、4頁。「米大統領と平和」同、1906年12月13日朝刊、2頁。これらの記事でノーベル賞、ノーベル平和賞は「ノオベル賞金」、「平和賞金」、「ノーブル、ピース賞典」と表現されている。
- 15) 「ノーベル賞典」『慶應義塾學報』第89号、1905年4月、53～55頁。著者は、目次には単に「記者」と記されているのみである。
- 16) 同上、55頁。
- 17) 水原子「奉公上より見たるノーベル氏の賞金遺贈」『奉公』第46号、1906年11月11日、1～14頁。
- 18) 同上、13、14頁。
- 19) 有賀長雄「＜記事＞半月外交史 ルースヴェルト大統領ノーベル賞典を受く」『外交時報』第10巻第2号、通号第111号、1907年2月、6頁。同「＜記事＞半月外交史 ルノール博士ノーベル平和賞金を受く」『外交時報』第11巻第2号、通号第123号、1908年2月、7頁。
- 20) 有賀長雄「＜記事＞半月外交史 独逸皇帝とノーベル平和賞金」『外交時報』第13巻第9号、通号第154号、1910年9月、1頁。
- 21) 「ノーベル賞牌」『治療薬報』第19号、1907年2月1日、9頁。
- 22) 「＜彙報、学事＞『ノーベル』財団平和賞金懸賞ニ関スル通報」『官報』第8241号、1910年12月9日、256頁。「＜彙報、学事＞『ノーベル』平和賞ニ関スル通報」『官報』第8527号、1911年11月21日、446頁
- 23) 1945年は、1945年8月15日までを対象とした。
- 24) 朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアルに基づき、筆者が集計した。記事はノーベル賞に関して関連性の高いものもあれば、低いものもある。そうした各記事の重要度については加味せずに件数を数え、全体的傾向を捉える手段としてのみ同データベースを利用した。
- 25) 藤井宇平『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』（世界最良書普及会、1909年）。奥付に著作兼発行人として藤井宇平と記されているため、同氏の名前を著者とした。同書の広告にある藤井宇平の肩書としては「法学士 前農商務省嘱託、特許局事務取調」、「前外務省翻譯官、法学士」とある。国会図書館に所蔵されている同書は、「明治四十二年四月五日発行」とあるが、「明治四十二年三月三十一日発行」の版も存在する。
- 26) 「世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳」『読売新聞』1908年12月13日朝刊、1頁。「世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳」『東京朝日新聞』1908年12月14日朝刊、1頁。両方の広告は、ほぼ同一の割り付け、内容である。『読売新聞』1909年4月10日朝刊、1頁にも同書の小広告がある。
- 27) 藤井宇平、前掲『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』、7頁。
- 28) 同上、13頁。
- 29) 同上、14～15頁。
- 30) 同上、20～21頁。
- 31) P.-T. Cleve, "ALFRED NOBEL, sa vie et ses travaux," *Les Prix Nobel, en 1901* (Stockholm: Imprimerie Royale P.-A. Norstedt & Fils, 1904), s.1-22.
- 32) *Ibid.*, s.30. *Les Prix Nobel, en 1902* (Stockholm: Imprimerie Royale P.-A. Norstedt & Fils, 1905), s.1. *Les Prix Nobel, en 1903* (Stockholm: Imprimerie Royale P. A. Norstedt & Söner, 1906), s.1. *Les Prix Nobel, en 1904* (Stockholm: Imprimerie Royale P. A. Norstedt & Söner, 1907), s.5. 人物の詳細については、以下のスウェーデン人名事典を参照。"Per Teodor Cleve," *Svenskt Biografiskt Lexikon*, <<https://sok.riksarkivet.se/Sbl/Presentation.aspx?id=14889>>.
- 33) Henry de Mosenthal, "The Inventor of Dynamite," *The Nineteenth Century*, No.260, October 1898, pp.567-581.
- 34) W. F. Freid, "Obituary Notices, Henry de Mosenthal," *Journal of the Chemical Society. Transactions*, Vol.103, 1913, pp.763-764.
- 35) 藤井宇平、前掲『世界的偉人ダイナマイト王 ノーベル傳』、27-36頁。
- 36) 同上、39～114頁。
- 37) 同上、117～137頁。
- 38) 同上、138～165頁。
- 39) 同上、165～173頁。
- 40) 「新刊雑書 ノーベル傳」『東京朝日新聞』1909年4月15日朝刊、6頁。
- 41) 「新刊寸評 ノーベル傳」『読売新聞』1909年4月22日朝刊、5頁。
- 42) 堀七蔵『文化のさきがけ 発明家と発見者（少年少女常識叢書）』（文洋社、1924年）。
- 43) 同上、はしがき1～2頁。

## ノーベル賞の国際政治学

- 44) 同上、読者諸君に2～3頁。
- 45) 同上、1～10頁。
- 46) 同上、10～26頁。
- 47) 野邊地天馬『大科学者物語』（婦人之友社、1932年）。
- 48) 同上、はしがき1頁。
- 49) 同上、162、163頁。「ノーベル賞」という用語は1920年代から使われ始め、1930年代に使用が増え、1940年代には一般化した。
- 50) 日本学術振興会訳編『ノーベル賞二関スル諸規程、(付)ノーベル協会一九三六年度事務会計報告』（日本学術振興会、1937年12月）。
- 51) 同上、頁番号なし。
- 52) 岡本拓司「戦前期日本の医学界とノーベル生理学・医学賞——推薦行動の分析を中心に」（『東京大学教養学部哲学・科学史部会 哲学・科学史論叢』第4号、2002年1月）、39～46頁。岡本は、第二次世界大戦以前における自然科学3賞の日本人候補についてノーベル賞選考史料に基づき精力的に研究を行なっている。それによれば、生理学・医学賞については多数の日本人候補が推薦されていたが、優れた業績にもかかわらず受賞できなかったためにノーベル賞の選考で日本人が差別されているのではないかとの疑念が出ていた。日本の科学者、学界のノーベル賞受容については、岡本の前掲論文のほか、以下の論文も参照されたい。岡本拓司「ノーベル賞文書からみた日本の科学、1901年ー1948年——（Ⅰ）物理学賞・化学賞」（『科学技術史』第3号、1999年）。同「ノーベル賞文書からみた日本の科学、1901年ー1948年——（Ⅱ）生理学・医学賞（北里柴三郎から山極勝三郎まで）」（『科学技術史』第4号、2000年）。同「日本人とノーベル物理学賞：1901年ー1949年」（『日本物理学会誌』第55巻第7号、2000年）。同「山極勝三郎の非受賞が教えたこと」（『学術月報』第55巻第3号、2002年3月）。同「戦前期の日本の化学とノーベル賞——ノーベル賞選考資料から」（『現代化学』第382号、2003年1月）。
- 53) 呉建『池の素描』（文藝春秋社、1940年）、54～57頁。
- 54) 武者小路公共は、1929年9月から1933年9月まで在スウェーデン特命全権公使を務めた（秦郁彦編『日本官僚制総合事典 1868-2000』東京大学出版会、2001年、45頁）。呉がスウェーデンを訪問したのは、この期間ということになる。
- 55) 呉、前掲『池の素描』、55～57頁。
- 56) 西澤勇志智『ノーベル兄弟（近代科学者傳1）』（朝日新聞社、1941年）。
- 57) 横尾榮『ノーベル傳』（富山房、1942年）。
- 58) R・ゾールマン、H・シュツク『大ノーベル傳』菊池武一訳（東峰書房、1942年）。
- 59) Henrik Schück och Ragnar Sohlman, *Alfred Nobel och hans släkt* (Uppsala: Almqvist & Wiksells Boktryckeri, 1926). Henrik Schück und Ragnar Sohlman, *Nobel: Dynamit, Petroleum, Pazifismus* (Leipzig: Paul List Verlag, 1928). Henrik Schück and Ragnar Sohlman, *The Life of Alfred Nobel* (London: William Heinemann, 1929). Ragnar Sohlman and Henrik Schück, *Nobel: Dynamite and Peace* (New York: Cosmopolitan Book Corporation, 1929). 英語版は、同一の翻訳であるが、英米で書名、章の構成、収録写真などが異なる。
- 60) R・ゾールマン、H・シュツク、前掲『大ノーベル傳』、訳者序2～3頁。
- 61) 西澤勇志智『新兵器化学 毒ガスと煙』（内田老鶴圃、1925年）、同『新兵器化学 花火の研究』（内田老鶴圃、1928年）。
- 62) 西澤、前掲『ノーベル兄弟（近代科学者傳1）』、序。
- 63) 横尾榮『エジソン伝』（富山房、1950年）。同『ワット伝』（富山房、1950年）。
- 64) 横尾、前掲『ノーベル傳』、序1～3頁。
- 65) 同上、序1～2頁。
- 66) 横尾、前掲『ノーベル傳（再版）』、序1頁。
- 67) コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』（岩波文庫、1936年）。同『シャーロック・ホームズの回想』（岩波文庫、1937年）。同『シャーロック・ホームズの帰還』（岩波文庫、1938年）。
- 68) R・ゾールマン、H・シュツク、前掲『大ノーベル傳』、訳者序1頁。
- 69) 同上、訳者序2頁。
- 70) 同上、訳者序2頁。
- 71) フランス・エミール・シツランバア、ジグリッド・ウンセット『しとやかなる天性、ふたりの母、瀬戸人形（ノーベル賞文学叢書1）』鶴田知也、宮原晃一郎訳（今日の問題社、1940年）からセルマ・ラゲルレフ『エルサレム（ノーベル賞文学叢書18）』前田晃記（今日の問題社、1942年）まで全18巻に及ぶものであった。
- 72) 「ノーベル賞文学叢書 全十八巻」『東京朝日新聞』1940年5月20日朝刊、1頁。これは、第1巻の配本を宣伝するものであった。同様の広告として、ロマン・ロオランの第8巻と既刊を宣伝するものもある（「ノーベル賞文学叢書 姉と妹」『東京朝日新聞』1941年2月26日朝刊、2頁）。
- 73) フランス・エミール・シツランバア、ジグリッド・ウンセット、前掲『しとやかなる天性、ふたりの母、瀬戸人形（ノーベル賞文学叢書1）』、『しとやかなる天性』序1、5頁。
- 74) 「ノーベル賞文学叢書 全十八巻」『東京朝日新聞』1940年5月20日朝刊、1頁。
- 75) 「ノーベル賞文庫」『東京朝日新聞』1927年4月7日朝刊、5頁。
- 76) 「ノーベル賞文庫」『東京朝日新聞』1927年4月13日朝刊、9頁。その他、同全集の広告は、同新聞、1927年4月11日



朝刊、1頁、同年4月12日朝刊、1頁、同年4月17日朝刊、4頁、同年5月6日朝刊、3頁にも掲載されており、予約者を積極的に募っていたのがわかる。

- 77) 「彙報 官庁事項 予約出版届出」『官報』第4295号、1926年12月16日、428頁。「彙報 官庁事項 予約出版廃絶」同、第41号、1927年2月21日、442頁。「彙報 官庁事項 予約出版届出」同、第82号、1927年4月11日、291頁。「彙報 官庁事項 予約出版届出事項中変更」同、第437号、1928年6月13日、328頁。
- 78) 「彙報 官庁事項 予約出版廃絶」『官報』第515号、1928年9月12日、290頁。
- 79) 江口芳樹『文明を築いた人々』（青年書房、1942年）。
- 80) 同上、はしがき1～2頁。
- 81) 同上、295～301頁。
- 82) 同上、301頁。
- 83) 同上、303頁。下瀬火薬は1893年に海軍に制式採用され、日露戦争中の日本海海戦で威力を発揮し、その後日中戦争初期まで使われ続けた。詳細は、以下の文献を参照されたい。小池重喜『日本海軍火薬工業史の研究』（日本経済評論社、2003年）第1章。
- 84) 横山夏樹『輝く靖國物語』（太平書房、1944年）。
- 85) 同上、3頁。
- 86) 同上、209～220頁。
- 87) 同上、210～212頁。
- 88) 同上、218～219頁。
- 89) 同上、219頁。
- 90) 同上、220頁。
- 91) 同上、220頁。
- 92) 高木六郎『使用解説火薬』（有象堂出版部、1943年）、50～68頁。
- 93) 同上、54～55頁。

付記

本稿は、2016年度国外派遣研究、2016年度・2017年度高崎経済大学研究費による研究成果の一部である。高崎経済大学および高崎市に心よりお礼申し上げます。